

インダス・プロジェクト
ニュースレター

インダス・プロジェクト ニュースレター

第7号

2010年8月5日発行

ごあいさつ

今年の夏は大変暑いですが、皆さんいかがお過ごしでしょうか。

いつもプロジェクトにご支援ご協力賜り、ありがとうございます。早いもので、プロジェクトが本研究になって4年目になりました。あと1年半でプロジェクトは終了を迎えますが、これからはプロジェクトの成果をまとめて行かなくてはなりません。今年はインドでおこなった発掘成果を報告書として出版する予定です。また、古環境研究グループの成果も徐々にまとまりつつあります。もう一踏ん張りです。ゴールに向けて、皆さんとともにがんばっていきたくと決意を新たにしております。

さて、ニュースレター7号をここにお届けします。今回は今年1月末におこなわれた、インドのグジャラート州ブジで開催された国際会議（ブジ・ラウンドテーブル）の特集号です。インドでの発掘は昨年度で終了しましたが、インドでプロジェクトの成果を発表する機会をもちたいと考えておりました。その意をくんで、カーンメール遺跡の発掘を一緒におこなった、グジャラート州の考古局のY.S. ラウトさんとラージャスターン・ヴィディヤピートのJ.S. カラクワールさんが今回の国際会議開催を引き受けてくれました。ラウンドテーブルは1月28日から31日にかけて、ブジのプリンス・レジデンシー・ホテルにておこなわれました。

会議には、フィンランドのA. パルボラさんやイタリアのM. トーゾィさんなど海外からの参加者をふくめ、インド各地から多数の研究者、院生学生が参加されました。28日から30日は会議をおこない、31日はドーラーヴィーラー遺跡までのエクスカージョンというプログラムです。会議の重要なトピックはインダス文明のなかでのグジャラート州遺跡の特徴を議論することでした。い

くつかの遺跡から出土された土器も持ち込まれ、活発な議論がおこなわれました。その成果はいずれ出版される予定で、カラクワールさんを中心に現在原稿を集めているところです。

今回、日本から地球研の研究者すべてが参加したのをはじめ、コアメンバーのうち、生業研究グループの大田（福井県立大学）をのぞく、古環境研究グループの前空（広島大学）、伝承文化研究グループの後藤（東北大学）、物質文化研究グループの宇野（国際日本文化研究センター）、新しく立ち上げたDNA研究グループの斎藤（国立遺伝学研究所）の各氏が参加してくれました。とくに、後藤さんはヨーロッパで研究するというインド学の伝統にしたがって、これまでインドに行ったことがなく、今回生まれて初めてインドに行かれました。また、松井さん（東京大学東洋文化研究所）や斎藤さんなど、これまで一緒にインドへ行く機会のなかった、その分野で名をなしている研究者たちも参加してくれました。そういう一流の研究者がインドの辺境の地ブジやインダス文明遺跡に集う機会はめったにないので、代表して、後藤さん、松井さん、斎藤さんの三名に、今回のブジ行きの感想を書いていただきました。ニュースレターへの寄稿を快諾してくださったお三方に、ここで謝意を表します。

日本から参加された皆さんには、会議の中日の1月29日に、国際会議が継続するなか、われわれが発掘をおこなったカーンメール遺跡とカッチ湿原のなかにある紅玉髓の原石が採取できる場所に行き、インダス・プロジェクトの発掘現場を直接見学してもらうことができました。この機会を作ってくれたカラクワールさんに、この場を借りて御礼を述べておきたいと思います。この日帰りツアーと最終日のドーラーヴィーラー遺跡へのエクスカージョンは、プロジェクトメンバーで、インダス文明を実感として体験したことのない方に身近に感じていただけたのではないかと、ひそかに喜んでます。

ただし、反省点もありました。水が問題だったのか、食事がよくなかったのか、原因がはっきりとしませんが、体調を崩される方が結構いらっしまったことです。とくに、宇野さんなどが現地の医者に回診をお願いすることになったり、松井さんなどがドーラーヴィーラー遺跡のエクスカージョンに参加できなかつたりしたのは残念でした。大事にはいたらなかったのがせめてもの救いです。

来年度はいよいよ最終年度です。予算が許すならばもう一度インドで国際会議を開催したいと考えておりますが、そのときにはまた参加していただければ幸いです。今後ともどうかよろしく申し上げます。

プロジェクトリーダー
長田 俊樹

ぶじ往還の記

後藤 敏文（東北大学）

初めてのインドであった。インドと関わる仕事はしてはいても、古い時代の文献を専門とし、かつ、その前史に興味の中心があるため、現代インドは遠い地のままであった。地球研とそのネットワークのお蔭でとうとうインド、ブッジ Bhuj（以下ブジとする）に行くことができ、私個人にとっては人生の一快事であった。考古学、フィールド研究の実際やその成果を吟味する術を知らないで十分に理解が至らないが、人間の営み自体を対象とし、人類普遍の理性を以て判断することに変わりはないから、私の頭の中を去来したことどもを書いても許されるであろう。しかし、専門にする古インドアーリヤ語（サンスクリット）文献と、インダス文明、そして現代の生活との間を具体的にどう組み立てて理解すべきか、改めて見通しが立たないことに気づく。インドでわしも考えた、とは行かないことを白状しておく。ただし、全くの素人旅行というわけでもない。インダス文化圏の時代に近い文献資料については、おそらく理解の最先端にいる者の一人であることを自負している。しかも、この分野の新知見は翻訳や概説書からは得られない。と能書きを張っておいて、幾つか問題提起を心懸けたい。

1. 水

なんといっても「水」が気になる。乾期には塩分の

濃い平原が中心であるが、一年を通してどのような環境であるのか、そして、当時どうであったのか。海や河川網との関係は。河川から水がもたらされることで氾濫原が季節的に海まで連なり広がると考えるのが自然であるが、現在どうなっているのであろう。季節的湿原地帯は Rann とよばれるそうであるが、上流からの水が湖を作り、部分的にのみ海に連なるとしても大規模な潟湖のようなものを形成するであろう。その場合塩分はどれほどのもので、耕作や牧畜はどのようになされるのであろうか。その上で、紀元前 3 千年紀の状態を想定してみる。秋田県の象潟は 1804 年の大地震で、いわば松島のような状態から隆起して生じたものと聞かすが、カッチー帯の広大な領域にそのようなことが起こっていれば知られていない筈は無かろう。しかしまた、象潟の隆起といっても 2-3 メートルのはずであるから、海水面の低下後退によっても最終的には同様の結果がもたらされる。海と降水量両面から、当時の「水」の解明が待たれる所以である。太陽活動の周期的変化（紀元前 2700、2200、1800 年前後にそれぞれグランドマキシマム、同 1300 年頃グランドミニマムがあったとされる）は特に考慮しないでよいだろうか。

2. 道

交易（インダス文化圏内、外）が重要な位置を占めていた当時の交通手段の同定は不可欠であるが、これも海水位と関連する。街道、乾期の河川路を用いる陸路、河川や海による船運を具体的に詰める必要がある。ドーラーヴィーラー Dholavira の城塞部はミュケーナイ Mukēnai を思わせるが、遙かに高い丘陵の上に立ちそれ自身急峻な丘を成すミュケーナイのアクロポリスからは港（「海のミュケーナイ」）へ連なる街道が見渡せる。途中人工的な建造物はなく、街道は丘陵地帯を右に背負い溪谷の右岸を巻くように走る。ミュケーナイの都城から遠からぬ位置に「アトレウスの宝物庫」が口を開いている。左岸は一段と低くどこまでも広がる松の森である。往時トロイア戦争から凱旋したアガメムノンが自らの居城へと港から上ってきた風景を今に見る思いがする。ドーラーヴィーラーの道はどこを通過していたのか。舟付けが可能であったのか。北側だけに開いた狭い門へ、どのような道が続いていたのか。周辺の調査が待たれる。旧街道が残されていない地理的環境（平原、氾濫原）自身が何かを語っているのかもしれない。

3. 城壁

インダス諸都市の城壁は何のために築かれたのか。先回の報告会の折り、宇野先生がまとめておられたと記憶するが、外壁の厚さ、不用の食料などを外部に捨てていることなどが防御用の城壁ではないことを物語るという。防衛施設ではない城塞という概念はヨーロッパの考古学には馴染みのない概念であろう。カーンメール Kanmer の幅 18 メートルに達するという石積みは現代のロックフィルダムを思わせる。石積みの内部に遮水性の強い粘土質などが使われた痕跡はないであろうか。水からの防御施設であれば門（出入口）は必ずしもいらないであろうし、石積みの上部平面は作業用に使われた可能性もある。上水、下水の完備（水の確保と水からの防御）は氾濫に備える施設の特徴と言える。外敵に備える施設であれば、外側に堀が作られるのではなかろうか。城郭内部の狭さは普段の生活空間ではないことを物語る。周囲には人々が生活しており、耕作、牧畜が営まれていたであろう。ドーラーヴィーラーのプールのような設備は多量の真水を蓄え得たはずであるが、カーンメールは人為の積極的な関与を必要としなかったのであろうか。農耕には氾濫後の水分を利用するとしても、家畜たちが多ければ年間を通じて多くの水が必要であったろう。井戸水の質と量によっては、それでまかなえるのであろうか。ドーラーヴィーラーとカーンメールしか知らない素人の目には、両遺跡を取り巻く環境に大きな差があったものと思われる。ドーラーヴィーラーの貯水・給水設備の規模は海水の近さ、塩分の濃さから説明されるであろうか。ドーラーヴィーラーの「居住地」はアクロポリス部分よりも低い位置にある。洪水時の水位に大幅な変動差があったものか。アクロポリスは非常時用の最後の砦（ヨーロッパの防御教会 Wehrkirche のような、ただし、水を外敵とする）とも考えられるし、当然、技術者集団や交易担当エリート、来訪者たちを包摂する「都市」の機能の中には権威的象徴的な意味も含まれよう。防御用でない城塞都市が広範な地域に多数建設され、そしてやがて機能しなくなる、あるいは、必要でなくなった理由は何であろうか。

耕作の中身、家畜の数と種類などについて、インダス文化圏内でも当然差異はあったであろう。どのような環境下で、何が具合的に栽培され（小麦、豆類、葉っぱ類、根菜、綿花?）、飼育されたものか（瘤牛、駱駝、ロバ、豚、水牛?）。同文化圏内には競合よりも協力態勢が支

配的であったように思われる。交易が支えであり、手工業（紅玉髓・瑪瑙・水晶・貝殻の加工、土器、石器、金属器、石細工、象牙細工、木製品、ラピスラズリ、金、銀?）の各地に於ける発達と相俟って合理的な選択がなされたものであろう。需要があるところ協力して生産を増やすことが得策であり、この流れに乗れなければ村落、部族の存続が脅かされるといったような、差し迫った経済環境、当時のグローバル経済の存在が想定される。これまでの報告からは、作業施設が「アクロポリス」内であったように理解される。これは一種の都市生活者の存在を示唆し、広い意味での分業を前提とする。おそらく雇われたり連れてこられたりした異部族民ではなく、インダス文化圏の担い手自身による産業ではなかったか。この環境が崩れ、中核施設（インダス諸都市）が放棄された後、おそらく前 2 千年紀後半にアーリヤ *ārya-* (*āriya-*とも発音された) 諸部族のインダス上流域への進出が始まる。ただし、インド最古の「ヴェーダ」文献からはインダス文化解明に資する直接の言及は得られず、インダス諸都市の存在を指すと思われる記録も無い。一般に「城塞」と訳される防御柵 *púr-* や石で築かれた防御施設 *vála-* についてはさらに検証が必要であろう。異部族との抗争は屢々語られるが、直接インダス都市を指す事例はないように思われる。

4. インド・イラン共通時代とアーリヤ諸部族

アーリヤ諸部族はカーブル *Kābul* 上流を中心とした地域からカーブル川（リグヴェーダにおける *Kúbhā*）に沿って東進し、インダス上流域に進出したものと推定される。アーリヤの別の一派（おそらく、若年男子のみからなる派遣部隊）は西方に進出し、前 16 世紀メソポタミアに、フッリ人を支配下に収めてミタンニ *Mitanni* 王国を建設している。カーブル上流域一帯にはイラン系の部族が残り、何百年かを凌いだ後、ゾロアスター *Zarathuštra* による生活と宗教の改革がアレイア (*Haraiva*、現 *Herāt* 付近) に起こり、アレイア、バクトリア (*Baktriš*、現 *Balkh*)、マルギアーナ (*Marguš*、現 *Merv*)、ついで南のアラコースィア (*Harauatiš*、現 *Kandahar* 付近) において成功を収める。

アーリヤ諸部族の大移動の背景には何かユーラシア全般に関わる原因が伏在するはずであるが、それはとりもなおさず、インダス文化圏のネットワークが衰退する原因に連なるものであろう。あるいは、インド・イラン系



図1 インド・イラン河川図 (後藤描)

諸部族の拡大そのものが原因である可能性もある。彼らの中核は前3千年紀後半にバクトリア・マルギアーナ考古複合 (BMAC) の先進定住文化に出会い、社会制度、契約、宗教、儀礼に亘る大きな影響を受けたことが推測されるが、BMAC 諸都市の城塞はインド・イラン系諸部族の攻撃から身を守る必要から作られたと考えるのが近道だからである。ギムブタス Marija Gimbutas は、これより 1000 年あるいはそれ以上にドナウ河口付近に城塞都市が出現する理由を、攻撃的な「クルガン文化」の担い手たち、すなわち、インド・ヨーロッパ語族の基となった人々が侵出したためと解釈する。それと同様の現象が遅れて東方に押し寄せたことが窺われる。

インドアーリア系諸部族が西側のメソポタミアと東側のインダス上流域とに移動し、アヴェスタ語を遺した東南イラン語派の諸部族は少し南下して拠点を定めた。古ペルシャ語 (西南イラン語派) の地方名 Harauvatiš、新アヴェスタ語の Haraxšaiti はインドの河川名 Śarasvatī と同じ語 (「池をもつ」) である。Haraxšaiti は純粹のアヴェスタ語の語形と異なり、アラコースィアの方言形を反映するものと推定されているが、同じ現象は、Hermand 川の北側を並行して流れ、ハムーン湖に注ぐ Xāš Rūd の古名、新アヴェスタ語 Xšāstrā にも見られる。この

Xšāstrā は『リグヴェーダ』に現れる Suvāstu- にほぼ (suffix 以外) 一致し、後者は現在の河川 Swāt の古名である。いずれも「居住地、牧草地に恵まれた」を意味する。アレイアの古ペルシャ語形 Haraiva には Sarāyu- がほぼ対応し、新アヴェスタ語、単数対格形 Harōiium、さらに派生形容詞 hārōiui- 「H 出身の」とともにインド・イラン祖語 *sarajū- に遡る。Sarāyu- は一般にアヨーダー Ayodhyā の地でガンジス本流に注ぐ現 Sarayu に比定されるが、リグヴェーダに知られるそれはインダス河域の一河川名と思われる。語義は定かでないが、サラスヴァティーと同じく「湖沼」を意味する語に連なるか、あるいは「流れ進む」と解しうる。ブジの東北方には現在も「サラスヴァティー」という川が流れていることを、博物館にある地図から知った。捜せば各地にありそうである。普通名詞が部分的に残った可能性もあるが、神話的な河川に基をもつ女神の名を後からつけた可能性が高いであろうか。

5. ユーラシア古代文化ネットワーク

インド・イラン共通時代、あるいは、混在時代の諸部族が遭遇した先進文明バクトリア・マルギアーナ考古複合 (BMAC) はインダス文化圏と時代的に並行し、相互

に交流のあったことが指摘されている。共に、インドからアフガニスタン、中央アジアを経て西方に広がるユーラシアの文化ネットワークの一部を成していたものであろう。BMACの背景には東方山岳地帯を流れるアム・ダリヤー（Oxus）流域の文化、鉱産資源の存在もあったであろう。インド・イラン語派の諸部族をはじめ、競争・拡大・攻撃を原理とする経済形態を持つインド・ヨーロッパ語族の拡大・移動が「平和な」ネットワークを破断した可能性は考えられよう。以後、前13世紀末から前11世紀にかけて西方の歴史に登場する「海の民」にまで続く一連の動乱の始まりが示唆されるであろうか。自然環境の上では、前16から15世紀に懸けて地中海に地震が続き、サントリン島（Thera）は二度の大地震による破壊の後、噴火によって大半が海に没した。

インダス文明とそれを包摂するネットワークの解明は、かくしてインド・ヨーロッパ語族の東西への拡大、アーリヤ諸部族のインドへの侵出、そして、今日にまで続く部族の原理と普遍的理屈とを盾にした人類史の「グローバル化」を理解するために重要な意味を持つ。インドは、ネットワークの東端に位置し西側に開口部を持つ閉じた袋状の文化圏を形成することと、その後の歴史に比較的移動が少なく今日にまで伝わる要素の多いことから、良好な研究対象、実験場である。今回の発表の中でトーズィ Maurizio Tosi 教授が描いたユーラシア・ネットワークの全体像はとりあえず妥当なものであろうが、研究がさらに進めば、楼蘭（小河墓など）、中国、北ユーラシア、さらには、アフリカも当時の国際社会の視野に入ってくるのが予想される。

トーズィ・グループの発表中最も注目すべき新知見はロータル Lothal の再評価であろう。私に正しく理解できたかどうか定かではないが、西方からの渡来物は専らロータルに入り管理されていたことが部屋の扉や箱に用いられた多数の封泥の破片、痕跡から跡づけられるようである。「東のバハレーン」はドーラーヴィーラーではなく、ロータルであったことになる。オマーンと直接結びつけていた海運の存在、それを可能にする気象的条件が背景となったようである。すると、ドーラーヴィーラーは第二段階の大中継基地ということになるであろうか。後背地や大きな河川を背負わない事実上の島であること、インダス水域、ガッガル・ハクラー地域へと展がる扇の要の位置にあることなどが条件となっているであろうか。規模の大きさは（圏内）貿易の第一中継基地とい

う性格から説明されようし、居住域は宿泊施設であった可能性もある。インド圏内部の後背地、山間部・山岳地帯のルート、河川の道（船運と乾燥時の河床ルートと）、また、現在まで続くダウ船貿易に見られる海の道以外の、圏外への陸路、製品の行き来などが今後解明されて行くであろう。いずれにしても各発掘地の詳細な発掘報告と、周辺ないし発掘地点間の調査（道、アクセス、農耕、牧畜、鉱物）とが待たれる。手工業製品は何を「貨幣」に交易されたのであろうか。装飾品などは、遊牧民に見られるように、あるいは、子安貝のように、一種の銀行の役目を果たしていたものか。そして、印章・封泥の（多様な）機能は。

6. インダス文明の遺産

インダス文化圏には、城塞都市そのもの以外に、規模の大きい加工品、彫刻の類や、武器、明確な宗教的遺構、権威的差別に連なるものなどが見られず、一種の「おもちゃ文化」が支配的であったようである。これは、ある程度、今日まで続くインド的特徴かもしれない。後のインドに見られる複数の要素が既にインダス文明に見られ、それらはアーリヤ文化の覆いを破って表面に染み出してきた、古くて深く根づいた要素であることがしばしば指摘されてきた。インド菩提樹（アシュヴァッタ、ピッパラ）、シヴァ神、ヤクシニー（樹の女神）、リングア、スヴァスティカー（卍の右回りのもの）、七母神（サプタマートリカー）などなど。今回パルポラ Asko Parpola が発表したワニ崇拝もこれに属するであろう。それらの一つ一つをどのように価値的に文化構造の中に位置づけて理解すべきか、難問であるが、インダスのテラコッタに見られる荷車や衣装装身具の一部などが、現在各地の文物と殆ど変わらないことについてはほぼ共通の理解があるかと思われる。しかしまた、インド菩提樹などは当時からその地にあったということ以上に何かを語るであろうか。

アーリヤ系の人々は確かにインドに至り、少なくともことばの文化を統一かつ強力に貫徹した。今、ブジで話される地方の標準語は、そのようなかつて「共通語」として機能したアーリヤ系言語の一現代ヴァージョンにほかならない。しかし、ブジで出合った人々の生活からは、インダス時代以来存在し続けたものがアーリヤ文化の底に秘められて現在にまで受け継がれているという、よく言われることが本当のように感じられることも事実



図2 インダス印章：樹神礼拝と「七母神」

展覧会カタログ Aachen 1987: Vergessene Städte am Indus. Frühe Kulturen in Pakistan vom 8.-2. Jahrtausend v. Chr. Mainz (Verlag Philipp von Zabern) 1987, p.149 より

である。衣類や音楽にはゾロアスター教徒流入、ムガル時代の革新や人口の移動、移植、流行による影響変化が見られるであろうし、一概には論じられないとしても、ブジの人々には、携帯電話を持ったハラッパー人という要素が確かに残っているであろう。しかし、いずれにしても具体的に分析確定する方法を知らない。牛は専らコブウシに見えた。アーリヤの諸部族が連れてきた（というより、その後を追ってついてきた）牛たち（古インドアーリヤ語 *gáv-* < インド・イラン祖語 **gáw-* < 印欧祖語 **gʷóu-*, 英語 *cow* など同起源。シナ語古音 **ngjüŋ* [Karlgren No. 998] と同じく、擬音語がある時期に固定され、語として形成されたものであろう）は、長い年月の間に、この地方から姿を消したらしい。

現代に連なる要素として、一つ問題を提起しておきたい。図2はモヘンジョダロ Mohenjo-Daro 出土の名高いインダス印章である。菩提樹の中に角のついた冠をかぶっているように見える女神と覚しき者が立っている。それを、菩提樹の若木のような角のついた冠(?)をかぶる者が崇めているように見える。その右に、二つの波打つ形の角をもつ獣(水牛?)が控えている。下に「女神」と同じ方向を向いて、7人の女性的姿が立っている。彼女たちと樹上の女神とを比べて見ると、女神の特色は両の角にあり、頭の中央の突起物と頭の後ろに垂れ下がる部分は、形はやや異なるものの、下の7人にも共通して



図3 「壁飾り（覆い布）、グジャラート州」

国立民族学博物館特別展、大インド展カタログ「ヒンドゥー世界の神と人」1991、p.99、27 N07（中谷純江担当）より

見られる。両腕に並んだ突起物も共通である。7人はサブタマートリカー「七母神」と紹介されることが多い。「サブタマートリカーの像は、今日でも南インドのヒンドゥー寺院や村はずれの祠にしばしば見られるもの」(辛島昇『インダス文明』NHK ブックス 1980、p.200) という。しかし、リグヴェーダにも「7人の母をもつスインドゥ(河川)たち」、「7人の母をもつ報酬(祭官たちへの贈与)」という表現が見られる。図3は現代グジャラートの大きな布で、1991年に永ノ尾信悟氏を中心に開催された大インド展の際、中谷純江さんによって収集され国立民族学博物館に収められたものである。カタログの写真が小さくて確かめにくいだが、この中に働く女性の姿が見られる。彼女たちは頭髪を長く後ろへ垂らしているが、その髪は布にくるまれ、さらに赤い紐状のものを所々巻いてそれを固定している。頭髪の一部は同じく頭上へ布で絡め上げられ固定されている。スカート部分の形も似ている。つまり、モヘンジョダロの女性の姿は、現代または一昔前のグジャラートの女性の姿に連なる。頭上の形にはヴァリエーションがある。祭りの衣装かもしれない。印章では腕の部分にも突起物が並んでいるが、民博の布からは確かめられない。20年前の記憶では心許ないので、民博の近くに居られる皆様に直接の確認を乞う。

7. Humanity and Science

インダス印章の図象や文字に地域差、または都市の機能や「格」による差異が見出されるのだろうか。後のアーリア文化においても標準語の作用は強力であり、特にブラーフマナ、ウパニシャッド時代から仏教興起に至る時代（前 7/6 世紀 - 4 世紀）には新知見が全インド的に求められていたようである。インダス文化圏も強い統一性、共通性を示唆する。これから詰めて行くべき事柄は多岐多層に亘る。地理学、ミクロ・マクロ生物学、家畜学、栽培・野生植物学の実証的な研究データに立って、長田プロジェクトは短期間に成果を挙げつつある。今回の諸発表から判断すると、カーンメール等に於ける地球研の影響下に達成された研究成果はインダス考古学に標準的な指標をもたらしつつある。インドをはじめ、パキスタン、イラン、米、欧ほか、世界の人材を集め、目的に添って組み立てた意義も大きい。

インダス諸都市の存在は、当時および過去の「世界」のありかたを前提とする。当時の生活実体とその諸条件は、インダス文化圏に見出される一つ一つの項目を深く分析するとともに、背景にあった当時の世界地図の中で有意であった要素を洗い出し、しかるべき位置に置いて立体的に地図と年表の中に構築することによって初めて理解される。このプロジェクトが対象とする時代と地域とは、物理的背景、環地球的ハードウェアの検証点を押さえた上で人間の営みを総合的に吟味検証するのに適した、適度に閉じた実験場である。同時に、考察の対象は広い後背地とその後の展開へと地理的・時間的に開かれている。日高敏隆先生が折に触れて強調されていた“Humanity and Science” に込められた意味が活かされ、一つの典型的成果の提出が期待できる。



図4 ドーラーヴィーラー、アクロポリス東壁上から西を望む
(後藤写)

8. 仲間たち

今回のブジ訪問では、考古学の先端的現場に居られる諸先生、地球研の精鋭諸氏から学ぶことが多かった。さらに、それぞれの分野を越えて令名高い松井健、斎藤成也、木村李花子の諸先生と一緒にいる時間が与えられ、私個人としては多に教えられ刺激を受けた。松井氏からは刺繍、銀細工をはじめ、広く研究現場のあり方を教えて戴いた。木村さんには、無論、馬についてあれこれ尋ねて教えて戴いた。ドーラーヴィーラーの二本の柱(図4)がアクロポリス部の東端に東を向いて並んでいることから、太陽の運行と関係するのではないかとの意見を拝聴したが、蓋然性のある方向を指し示しているように思われ、反芻している。「二本の柱は柱頭部が異なる形をしている。腕時計で計測したときには真東を向き、南北に並んでいるものと思ったが、ドーラーヴィーラー遺跡平面図(例えば上杉彰紀『インダス考古学の展望』2010年、p. 77、Joshi and Bisht 1994 に基づく)によると南北軸は西に10°ほど傾いている。この柱の西側には八の字状の石積基盤が残り(写真参照)、両の円形部分の中央には柱の跡が遺されている。暦のための計測設備



図5 ブジの灯明祭り

1月31日、旧暦新年に先立つ満月の夜(後藤写)

であろうか。時計にも関係するであろうか。しかしまた、そもそもインダス期のものであろうか。] 斎藤氏からは広く宇宙、生物、人間、歴史、論理について柔軟かつ毅然たる意見を伺い、ヒトの理性に対する信頼とその限界とについて、説得力ある示唆と勇気とを与えられた。私ばかり得るところがあり、このままでは済まされないように思われるので、私の領域からもプロジェクトへの貢献に努めるべく、決意を新たにしている。

例えば紅玉髓一つが世界地図を読み解く鍵となりうる。紅玉髓を手に入れて、掌においてその声を聞いてみたかったということが、今回果たせなかった一つの心残りである。商品化、流通は今も昔も、まことに決定的なことである。Inayat Agate にメールを書いて幾つか注文したいと思っていたながら、今日まで文を書くゆとりが持てずに来てしまった。瑤瑠の丘を思い出す度に、あの場で抱いた不思議な鬱な気分が蘇る。地球という現代芸術の中に私自身が放り出されたかのようにであった。長田俊樹キャプテン、宇野隆夫先生、前奈英明先生、上杉彰紀、遠藤仁の両ヒットマン、寺村裕史さん、森若葉さん、大西正幸さん、園田建さん、河村たみ枝さん、神澤秀明さん、山田智輝さん、カラクワール、シンデ両先生はじめ、インドで出合った皆様、皆様に感謝。インドではぶじであった我が身も、仙台に戻ってから下痢を起こし、一日寝込んだ。医者に診てもらったところ、古典的病原性大腸菌 O1 (オー・イチ) 号とのことであった。「病原菌のホームラン王です」とはしゃいで何とかごまかした。

カーネリアンが結ぶ時空

——インダス文明と南アジアの工芸の人類学

松井 健 (東京大学東洋文化研究所)

ブジ・ラウンド・テーブル

Bhuj Round Table 2010 : International Conference on Gujarat Harappans and Chalcolithic Cultures が 2010 年 1 月 28 日から 31 日まで、インド・グジャラート州のブジで開催された。たしか 2009 年の 10 月頃に初めての通知があったが、大学の入学関係の諸行事の重なるこのタイミングでの開催に驚いたことを覚えている。研究所勤務の私も、大学院の入試関係の仕事をなんとか免除してもらっての参加となった。何度もインドのラージャス

ターン州、グジャラート州は訪ねているが、ブジのあたりは余程のことがないとなかなか訪問する機会がなく、インダス・プロジェクトの発掘しているサイトなどへのエクスカージョンもあるということで、楽しいシンポジウム参加となった。

ブジの町のはずれにあるシンポジウム会場のホテルが宿泊場所でもあり、時間が有効に使える設定になっていた。到着した 27 日にはすぐに、ブジの町のバザールに出かけたが、周辺が染織刺繍で有名なカッチ地方のため、いろいろな布が売られていて目を楽しませてくれた。バザールには、ミラーワークと呼ばれる鏡の薄片をぬいつけた刺繍の一種のために、丸や三角の鏡の薄片を売っている店まである。しかし、町のそこここにはまだ 2001 年の大地震の爪跡とおぼしき空地が残されており、まだ復興は完全とはいえないようにみえた。人口の一割が死亡したというから、復旧はそう簡単ではないのだろう。それでも、町は活気にあふれ、人びとは外国人観光客にすれておらず、私がよく知っているジャイプルのようにしつこいつきまといに閉口することもなく、楽しくバザールを散策することができた。

ブジの町は外壁で囲まれた城塞都市になっているらしく、周囲にいくつかの石造のアーチ門がしつらえられている。これらの Mahadev 門、Bhid 門、Sarpat 門、Patwadi 門といった門は、自動車道路をつくるために、城壁が壊されたためにぼつんと切り離されて保存されるかたちになっているが、なかなか堂々とした重厚な造りである。町の西側には Hamirsar 湖があって、水鳥が遊ぶ美しい町である。湖を臨んで立派な博物館もある。町の中心のバザールはショロフ・バザールといって、多くの金銀宝飾の店が並んでいる。だいたい高価な品物を扱う店が集中するのが、バザールの中心とみて間違いはない。ショロフ・バザールは、町の中心であるアーイナー・マハルという宮殿につき当たるようになっている。すぐ近くには、コロニアル・スタイルの旧野菜市場などもあって、味わいのある町並を堪能することができる。

銀の装身具のいくつかは、もうラージャスターンでは骨董扱いられているのに、この町では新品がまだつぎと製造されているのには驚く。ラバーリーという民族の男がつける足の指の指輪など珍しいものも散見される。とにかく、工芸の盛んな土地であることは、バザールを一步進むごとに感じられる。

会場は町の中心からすこし離れた幹線道路沿いにあっ



写真1 カルセドニーやアゲイトの原石の堆積
(マルダク・ベートにて)



写真3 マルダク・ベート採集のカーネリアンの原石



写真2 ほとんどが、カルセドニー、アゲイト、石英など

て、市内の老舗ホテルのアネックスというべきものでスタッフはよく訓練されていて、設備も立派なものであった。残念ながら、朝6時頃から夜11時頃までは、道路を通る大型トラックとその警笛でちょっとうるさいという難点はあったが、なかなかしゃれたつくりになっていて、シンポジウムもティータイムもランチもなかなか快適であった。28日午後からラウンド・テーブルは始まった。この内容についてはおそらくインダス考古学に詳しい方が別途報告されることだろう。

カーンメールからマルダク・ベートへ

シンポジウム2日目にカーンメールへのエクスカッションが組織された。ブジから約3時間のドライブ。小さいとはいえ、城壁に囲まれた遺跡は堂々としたもので、もう発掘を終えて埋め戻されているものの端正なたたずまいが想像された。遺丘は全面土器片でおおわれているとあってよい状態で、いやがうえでもインダス文明の人びとの暮らしぶりを考えざるをえなかった。そんな土器

片に混ざって、硬い光を反射するカルセドニー（玉髓）の破片も数見された。石器やビーズをつくるために、カーンメールの住人が外部からもち込んだものであろう。加工のときにでたと思われる破片が散らばり、石刃を割りとったあとの石核と思われるものも見られる。土器の赤いにぶい光と別に、白っぽく硬く太陽光を反射するために、よく目立つように感じられた。

時間が限られていたが、カーンメールからさらに進んで、これらのカルセドニーの原石のあるところへいくことになっていた。途中の町で車を乗り換える。私がよく行っていたパキスタンでいうところのカッチャー・ジープ（やわい四駆）ではだめで、パッカー・ジープ（強い四駆）でないと行けないということらしい。聞くと、リトル・ラン（Little Rann）を横切るのだという。カッチの干潟を横断するというのは、えがたい体験、いやがうえにも期待がふくらむ。それ以上に気になるのは、ビーズにも用いられる赤いカーネリアン（紅玉髓）などのカルセドニーの原石が、一体どんなふうにして見つかるのだろうかということだ。インダス古代人も採集に行ったかもしれないと想像すると、興奮を抑えることができなかった。

車は製塩場の横を通りすぎると、まっすぐに延びる轍に従ってリトル・ランを横切っていく。運転手と助手はグジャラート語しかしゃべらないが、運転手の横に坐っている私をどうも愛想がなくて、パキスタン人みたいだ、と言っているらしい。インドでは手で食事をすると、すぐにムスリムかパキスタンに長く生活している人間と見破られるのだが、ただ坐っただけでこういうことを言われたのは初めてで驚く。やはりパキスタン国境が近いからか。そうこうしているうちに、向こうに低い丘が

連なり、ヒンドゥー寺院らしいものが見えてくるようになる。この寺院を左手に廻り込むようにして車が止まる。高さ数メートルのこぶし大くらいの石が積み重なった丘が続いている。リトル・ランの泥のように細かい地面から、石の丘が立ち上がっているという感じである。よく見ると、これらの石は、すべてカルセドニーやアゲイトの原石である。割ると、その割れ目は、白や黄、青や赤の美しい半透明の光沢に輝いている。強い太陽光のなかで、キラキラと美しく、断面が縞状のもの、雲状のもの、同心円状のものと同様もいろいろあって、まったく見あきない。このように色模様が均等でないものをアゲイト（本来は、このアゲイトだけを瑪瑙と呼ぶ）、均等なものをカルセドニーと呼ぶらしいが、日本では両方をあわせてメノウと呼ぶことになっている。

美しいメノウのなかでも、インダス古代人のお気に入り、カルセドニーのうちの赤いカーネリアンであったことが知られている。彼らのネックレスは、カーネリアンを加工してビーズにして、それを美しく配列したものである。ハラッパから出土しているカーネリアンは水滴形に加工して周囲を金で囲ってペンダントにされているし、アッラーフディーノからは、長い筒状のカーネリアンのビーズが6本ずつ並べて、それを6組使う豪華なベルトが出土している（Agrawal 2009 : 100, Nandagopal 2006 : 97）。

カーネリアン・ビーズ

当然、このように重要な技巧（あるいは、当時の産業）であるから、考古学者も大いに注目しており、インダス・プロジェクトでは遠藤仁さんがカーネリアン・ビーズについて、研究している。遠藤さんの研究は、石器づくりとビーズづくりを統一的に扱うという点と、現在もおこなわれているカーネリアンのビーズづくりを現在主義の立場から検討してみようとする点で、二つの大きな特徴をもっている。その成果の一部は、すでに報告されている（遠藤 2008）。

驚いたことに、今でもカーネリアンのビーズづくりが、ほとんど手作業でおこなわれているということを、遠藤さんの報告（前記）で知った。そのうえ、カーンバートでアゲイトなどのビーズをつくっている工房を助けるために、このシンポジウムに参加している学生がその工房の作品をもってきており、即売してくれるということがわかった。さっそく品物を見せてもらって、もったいな

いような安価で品物を分けていただいた。さらに、そのときに、これらの石からつくられたペンダント・トップを見せられて、また驚いた。何と、それらのトップは、これらのカーネリアンなどを打ち欠いて、細石器にしたものだった。色が美しいゆえに、すばらしいペンダント・トップになるが、よく見ると、その細部の加工は、まさに、細石器づくりの技でつくられたものだった。こうした金石併用時代の技法がまったくそのまま伝えられているのである。石器が、今の時代ゆえに、装身具になっているのである。

金石併用時代から延々とカーネリアンはビーズや石器に加工されてきたということであろう。石刃などに用いる加工は、カーネリアンなどカルセドニーの原石を打ち割ることを基本としておこなわれてきた。打つ力の強さや方向をコントロールするために、相当に洗練された技法が用いられたにせよ、基本はこの打ち割るという作業にあったとみてよいだろう。

一方、ビーズは、それに加えて、穴をあけてそこに何らかの紐を通して身につけることが意図されている。ビーズの素材よりもすこしでも硬い石を用いて、すこしずつ穴をうがったのであろう。今日でもおこなわれているカーネリアン・ビーズづくりの手作業と、それはあまり変わらないものであつたらう。長い石のビーズは、この穿孔の技術が難しく、インダス地方の専売だったらしく、メソポタミアあたりへも輸出されていたらしい。技術的にも一段難しく、実用性を欠く。ゆえに、石器づくりのあとに、奢侈品であるビーズづくりがおこなわれるようになったと考えるのが普通であろう。しかし、そのように考える必要はないかもしれない。

フランスの高名な科学史家で哲学者のガストン・バシュラールは、『火の精神分析』という名著（バシュラール 1969）において、火の起源について興味深い見解を示している。その内容は直接この著書にあたっていたかくとして、彼は、火は実用性のゆえに発明されたのではなく、人間の深い夢想から人びとの生活のなかに生まれ出て用いられるようになったのではないかと考えている。カーネリアンの利用を、必ずしも作物の刈り入れや動物の解体といった実用のための石刃の作製のあとのことと考える必要はないかもしれない。この美しい石を何とかして身につけてみたいという欲望が、この石をあれこれといじくる動機になったと考えるのは、うがちすぎであろうか。



写真4 ネパールのカーネリアンのネックレス

とにかく、インダス文明時代の人たちを夢中にさせたカーネリアンなどのビーズは、今日よりもはるかに稀少で高価なものとして取り扱われたことは確かであろう。私は、このカーネリアンのビーズが、南アジアの古代文明でこのように重用されていたことを知って、このカーネリアン原石の産出されるインドのグジャラートから、遠く離れたネパールのことを思い出していた。

カトマンドゥのバザールから

私は、今回の Bhuj Round Table に参加するまで、昨年の12月から2回に分けてネパールのカトマンドゥ盆地を訪ねていた。私自身の工芸のグローバル化の問題に中心を据えた科研の調査であった。カトマンドゥのツーリストの集中するタメルというバザールには、宝石、貴石の装身具や、一見古そうに見える民具や仮面や彫像などを売る店もたくさんある。新しい装身具のなかにも、カーネリアンの石を加工したネックレスなどが見られるが、そればかりではなく、使われたカーネリアンのビーズのネックレスもときに売られている。

店の人たちは、山の人びとがやっていたものだ、とこともなげに語るが、カーネリアンのビーズは、ひとつひとつ結構痛んでいて、割れた面がすり減っていて、相当使い込まれているのがわかる。一連のネックレスになっても、ひとつひとつがビーズにばらされたものが、重さで売られている。通常、トルコ石やラピスラズリのビーズより安い、古いものは、新しいものより高く売られている。カトマンドゥ盆地の向こうの山地では、今でもこうしたカーネリアンのビーズを愛用している人たちがくらしているようなのだ。

さらにより東のネパール領の外に、ナガと呼ばれる人

たちがいて、彼らもカーネリアン・ビーズの愛好者であることが知られている。さきにふれたアッラーフディーノから出土したカーネリアンの長いビーズが6本ずつ並べられている「ベルト」とされているものは、ナガ人の民族例からひよっとすると首飾りである可能性がある。というのは、ネパールの東に分布するナガ人の男たちの首飾りは、やはりこのように大きくベルト状になっていて、長いカーネリアンやガラスのビーズを同じように何本も並べて用いている。もっとも、ナガ人はミャンマーとインドの国境付近という今日の分布地へは、東からやって来たと思われるから、インダス文明そのものの後継者とは考えられないのだけれども。

ツーリストは、通常は新しく加工されたビーズのネックレスやピアスを好むようだが、私などはつい古い、汚れたカーネリアンのビーズに目がいってしまう。聞くと、カーネリアンの赤色は血を連想させるため、それを身につけていると元気になる、というような考え方もあるらしい。いかにも、民俗的な発想である。このカーネリアンの色は、人工的につけることができるのだという。シンポジウムの会場で配られた Kuldeep K. Bhan 教授のパンフレット (Bhan n.d.) では、3回壺に入れて密閉して加熱することになっている。加熱によって、赤の発色が強くなるらしい。

遠藤さんによると、今では、別に3回とはきまっておらず、発色がよければ2回といったこともあるのだという。しかし、石を土器に密封して土器ごと「蒸し焼き」にするというのは、おもしろい。というのは、おそらく、この技術は、土器の製法と何らかのつながりがあるのではないかと想像されるからである。加熱して赤色を増すということは、カーネリアンの血との連想を強化するように感じられる。

カトマンドゥのカーネリアン・ビーズの玉は、楕円だったり円盤だったりして、単純なかたちをしていて、穴があけられていることが多いが、ときには、インドネシアのビーズ（ガラス製）でよくみられるうり玉というかたちに加工していることもある。これまた遠藤さんによると、金属器の使用が始まらなくては、この形には加工できない、とのこと。カーネリアン・ビーズは、約千年の時間を経て、それぞれの時代に可能な最新の技術によって加工されて、人びとを飾ったのであろう。やがて、それほど上等の石とみなされなくなってからは、都市的な中心から田舎や僻地へと伝えられ、今カトマンドゥで見

るように、ヒマラヤの山地の人びとに愛用されるようになったのかもしれない。

カーネリアン・ビーズは、はからずも私をインダス文明の考古学と南アジアの工芸の接するところへ案内して、南アジアの工芸がとんでもなく深い歴史をもっていることに気付かせてくれた。この機会を与えて下さったインダス・プロジェクトのリーダー長田俊樹教授には、まずお礼を申しあげる。遠藤さんはじめ、前李英明さん（広島大学大学院教育学研究科）にはマルダク・ベートのカーネリアンの「由来」について議論の相手をつとめていただくなど、今回のシンポジウムに参加しておられた方がたからはいろいろと貴重なお教をいただいたことも、感謝とともに書き付けておかななくてはならない。

引用文献

Agrawal, D. P. 2009 *Harappan Technology and Its Legacy*.
New Delhi : Rupa & Co.

バシュラール、ガストン 1969 『火の精神分析』（原著 1939）
せりか書房。

Bhan, Kuldeep K. n.d. *Temporary Exhibition on the Craft and Technology of Indus-Saraswati Civilization C.4600-3900 B. P.* . Vadoadara : Museum of Archaeology , Department of Archaeology and Ancient History, Faculty of Arts , The Maharaja Sayajirao University of Baroda.

遠藤 仁 2008 「グジャラート州カーンバートのビーズ制作工房」『インダス・プロジェクトニュースレター』4:1-5 頁。

Nandagopal, Choodamani 2006 *Arts and Crafts of Indus Civilization*. New Delhi : Aryan Books International, Bangalore : International Centre for Indian Art and Cultural Studies

人々は街を捨て、村に還る

斎藤 成也（国立遺伝学研究所）

最近、インダス文明の二つの遺跡を訪れる機会があった。ひとつは本インダスプロジェクトで発掘されたカーンメール遺跡であり、もうひとつは、インド国内でおそらくもっとも有名なインダス文明の遺跡だろうと思われる、ドーラーヴィーラー遺跡である。

カーンメール遺跡には立派な城壁があったが、その

内部は狭く、おそらく 500 平方メートルはなかったと推定されている。このようなところでは、せいぜい 100 名程度しか生活できないのではなからうか。なぜこのような小さな空間を城壁で囲んだのだろう。そこで城壁で囲まれた街について考えた。

竹内実著『北京—世界の都市の物語—』（文春文庫）の冒頭に、かつて城壁で囲われていた北京市の美しさを懐かしむ文章がある。現在でも、南京市と西安市は城壁が残っている。また市街のことを「城市」と呼ぶ事が中国では一般的なようだ。万里の長城も、住民全員を城壁の中に囲い込むという発想から来ているのだろう。ヨーロッパの都市も、かつては城壁のなかに市民が住んでいた。古代ギリシャのポリスの延長だろうか。

日本はどうだろう。中国の長安などに範をとりながら、平城京や平安京にまともな城壁を作らなかった。この意味で、城壁で囲われた城と都市を基本的に分離していたインダス文明（近藤 2007）と、共通する意識があるのではなからうか。戦国時代の山城も平城も、基本的には街は城の外側にあった。

都市はインダス文明が終わった時にいったんインドの土地から失われたが、その後千年以上経過した後、ガンジス川流域にはマガダ、コーサラ、マトゥラー、ラージギル、パータリプトラなどの、仏典にも登場する都市が生じた。これらの都市は、中国的あるいはヨーロッパ的な、全体を城壁で囲んだ形態であり、インダス文明の都市とは異なっている。しかしこれらの都市の大部分は、西暦 3 世紀以降には衰退していったのである（上杉 2007）。インダス文明で繁栄した都市が消えていった現象が、ガンジス流域とはいえ、また生じたのだ。

今のインドの人々も、かつてのインダス文明期の庶民も、どちらもひょっとして都市生活をあまり好きではないのではと、ふと思った。私自身があまり大都市を好きではないから、他の人もそうであってほしいという願望が入っているのかもしれない。

とりあえずそう考えると、釈迦やいわゆる六師外道が登場した、インドにおける諸子百家の時代に、出家して沙門となる生活様式がはやったことが、なんとなく理解できるのではなからうか。つまり、当時勃興した都市生活に対する反感もそこにあったのだと。

この仮説は、インダス文明が「滅亡」したというのは、ある意味では間違いであるという主張とつながる。仮に文明の興亡の尺度を人口とすれば、ハラッパーやモヘン

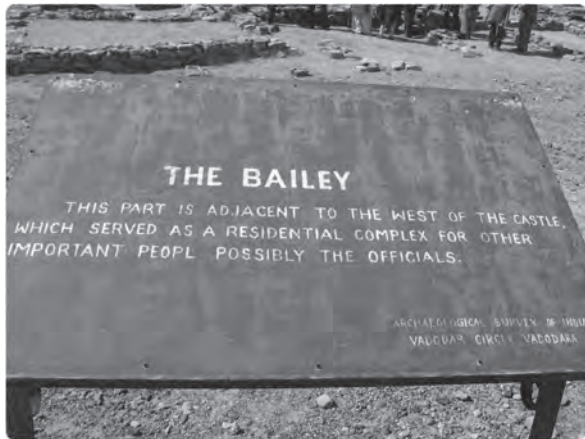


写真1 ドーラーヴィーラー遺跡のパネル

ジョダロのような大きな都市は消えてしまったとしても、インダス文明地域全体の人口が減らなかったら、インダス文明、あるいはすくなくともハラッパー文化は滅亡していなかったことになるからだ。この場合、ポストインダス文明の人々は都市を捨てて、村落に戻ったのである。あるいは嬉々として？

この主張を受け入れると、空想はさらに膨らむ。ハラッパーやモヘンジョダロを頂点とする、大・中・小の都市ネットワークとしてのインダス文明を支配していたのは、ひょっとすると外来の人々だったのではなかろうか。結局はメソポタミアから、当時「メルッハ」と呼ばれていた東の異境の地に進出した、というか、落ち延びた人々が支配階層を形作り、彼らとその子孫が築き上げたネットワークが、メソポタミアおよびそれに隣接する東部（後のペルシア地域）の政治情勢の変化と、自然状況の変化（グジャラート地域の海水面低下）による港湾の衰退という双方の要因により、あるときがらとくずれていったのではないかと。このとき、支配階級を形成していた異人達は、メルッハを去り、メソポタミアに帰っていった。そして残された土着の人々は、村落の生活に戻っていったのではなかろうかと。広大に広がるグジャラート州のカッチ湿地を遠望しながら、当時残り少なくなった遠洋航海船に乗り込んで、メソポタミアをめざしてインダスの地を去る人々の姿。

インドでおいしいインド料理をぱくつきながら、私はそんなことを夢想した。この仮説を検証するには、いくつかの方法がある。まずは人口変動の推定だ。こちらはすでに上杉彰紀さんが検討をはじめておられる。また今回出席した国際会議の参加者の何人かにお聞きしたところ、インダス文明の「滅亡」のあとも、人口が減少した

ことはなかったとのこと。これは、後漢後期から三国時代に至る戦乱によって、中原の人口が大きく減少したとされる中国の状況とは異なるように思われる。

もうひとつの検証は、インダス文明当時の人々の遺伝的多様性の推定だ。もし支配階層と一般住民が、遺伝的に異なる系統であることが示され、しかもそれらが片方は西アジアの集団により近縁であり、もう片方は、たとえば現代インド南部の人々の近縁だとなれば、とてもおもしろい。私はこのような古代DNAの研究をするということで、2009年度からコアメンバーに加わったのだが、インド過去数千年の気候はDNA分子をことごとく切断し去ってしまったのかもしれない。この場合、人骨は残っていてもそのなかにDNAは残らないことになる。

もう一度、今回訪問したインダス文明の遺跡について考えてみたい。カーンメール遺跡は、なぜあのような分厚い城壁を構築したのだろうか。そのなかに常時住まない場所だとすれば、緊急時に避難するためのものという考え方が生じる。城壁にはもうひとつ、「文明」の象徴という見方もできよう。城と考えると他の人間集団からの攻撃から守るものと思いがちだが、壁は人間だけでなく、いろいろな自然災害から内部の人々を守ってくれる。当時、地理的に比較的近くにドーラーヴィーラーなどのより大きなインダス文明都市の存在していたカーンメールの人々は、文明の象徴という意味も込めて、城壁を構築したのかもしれない。

最後に、ドーラーヴィーラー遺跡を見学することで知った英単語のこと。写真は、この遺跡で見つけた、英語での遺跡紹介パネルである。その冒頭にある Bailey とは、城壁とか郭内を意味する。この単語は、これまでに繰り返し見ている映画 "It's a Wonderful Life" (邦題「素晴らしき哉、人生」) で、敬愛する故 James Stewart が演じた主人公ジョージ・ベイリーの苗字としてだけ、私は記憶してきた。インダス文明遺跡で出会い、その苗字の意味がわかってうれしかった。

引用文献

上杉彰紀 2007 「歴史時代」山崎元一・小西正捷編『南アジア史1 先史・古代』山川出版社、41-56頁。

近藤英夫 2007 「インダス文明」山崎元一・小西正捷編『南アジア史1 先史・古代』山川出版社、24-40頁。

Pre-Modern Climate Change - Causes and Human Responses Stine Rossel Memorial Conference

寺村 裕史（総合地球環境学研究所）

2009年10月21日～23日に、デンマークのコペンハーゲン大学で、表題のカンファレンスが開かれました。過去から現在までの気候変動に焦点を当て、それに対する人間の反応をテーマにした会議です。具体的には下記4つのセッションが設けられ、完新世の気候復元や、環境汚染の考古学的データに関するトピック、安定同位体を用いた分析など、多様な角度から議論がなされました。大枠としてのテーマはプロジェクトとも非常に関わりのあるもので、環境と人間との関わりという意味で、現在の研究情勢を知るにはおおいに参考になったと思います。プロジェクトからは、長田俊樹・前李英明・寺村裕史の3人が出席しました。

Conference Sessions

1. Holocene Climate Reconstruction
2. Responses of Complex Societies to Climatic Variation
3. Archaeological Evidence for Pollution and its Ecological Implications
4. Stable Isotope Analysis in the Middle East



カンファレンス会場風景

19th Congress of The Indo-Pacific Prehistory Association

寺村 裕史（総合地球環境学研究所）

2009年11月29日～12月5日の日程で、ベトナム

のハノイにおいて、表題の大会が開催されました。

"Themes related to the archaeological record during the Holocene (geographical or chronological foci)" というテーマのもと、そのうちの1つのセッションとして "Recent Advances in Harappan Archaeology in India" が設けられ、長田俊樹を座長（兼発表者）として、宇野隆夫・J.S.カラクワール・寺村裕史が参加しました。長田は、プロジェクトリーダーとしてインダスプロジェクトの概要、宇野は主にファルマナー遺跡の発掘調査報告、カラクワールはカーンメール遺跡の発掘調査報告、寺村はプロジェクトにおけるGIS利用について、の口頭発表をそれぞれおこないました。本来であれば、あと数人のインド人研究者の発表が予定されていたのですが、日程の都合がつかずに不参加という残念な結果となり、発表者4人だけのセッションになってしまいました。ただ、インダスプロジェクト（おもに物質文化研究グループですが）の現時点での成果を、海外の研究者の前で報告できたことは、今後にもプラスになることだと考えています。



発表会場での事前準備の様子

第7回フィールドリサーチセミナー

「インド言語地図を読むー南アジアの言語分布の可視化ー」

大西 正幸（総合地球環境学研究所）

今年の3月15日、言語研究班は、熊本大学にて、熊本大学社会文化研究会との共催で、「インド言語地図を読むー南アジアの言語分布の可視化ー」と題するセミナーを開催しました。熊本大学との共催のセミナーは、去年3月の「文明と文字：記憶 vs. 記録」に続いて、2

回目です。今回のセミナーでは、一般向けに、まもなく完成予定の『南アジア言語地図』の内容を紹介することを主眼としたもので、「インダスプロジェクト言語研究会」のメンバーである長田俊樹、大西正幸、児玉望に加え、地図作成に係わった寺村裕史と稲垣和也が、それぞれの担当部分について講演を行いました。

セミナーでは、まず長田が地球研およびインダス・プロジェクトの概要を説明し、『言語地図』作成の経緯について話しました。

続いて、寺村が、GISを用いた地図作成の原理について、また稲垣が、南アジアを含む世界の言語のコード化について、説明しました。

次に、大西が地図全体の構成について説明した後、インド・アリア諸語の分布について講演しました。続いて、休憩をはさみ、児玉がドラヴィダ諸語の分布、長田がムンダ諸語とチベット・ビルマ諸語の少数言語の分布について、講演しました。

セミナーには、言語学科の大学院生や、他学部の手話を専門にする先生等の参加もあり、講演のあとも活発な質疑応答が続きました。小規模なセミナーながら、南アジアの言語についての関心を



寺村による発表の様子

高めるという意味ではなかなかの成功だったと言えると思います。

メンバーとしては、今後も、熊本大学との共催によるこのような催しを続けたいと考えています。

国際シンポジウム開催のお知らせ

8月20日(金)、21日(土)に文明環境史からの視点で気候変動説を考える国際シンポジウムを地球研の講演室にて開催いたします。インダス・プロジェクトが所属しております地球研の文明環境史プログラムの主催で、複数のプロジェクト共催のシンポジウムです。題目および発表内容は下記。時間の都合がつく方は是非ご参加下さい。

Rethinking on the Impacts of Climate Change in the Past

20, August (Fri) 13:00-17:10

"Greeting" (N. Tachinoto)

"The Mesopotamian Response to Climate Change: Collapse as Adaptation" (L. Ristvet)

"Diet and Climatic Shifts: Their Interrelationship During the Indus Civilization" (S. A. Weber)

"The Importance of Small Scale Approach to Understand Environmental Change, Landscape and Resource Exploitation: The Example of Holocene North Gujarat (India)" (M. Madella)

"Changing Agricultural Strategies in Relation To social and Environmental Changes at Harappan Kanmer, Kachchh, Gujarat" (A. K. Pokharia)

"Investigating the Interplay between Climate Change and Culture-history among Hunter-gatherer Societies at the



セミナーのポスター

Pleistocene/Holocene Transition in Northern Eurasia" (P. Jordan)

21, August (Sat) 9:30-14:30

"Challenge of High-Resolution Paleoclimatology: its Potential Impacts for Understanding of Relationships between Climate and Societies" (T. Nakatsuka)

"Climate Change, Subsistence Intensification, and Human Impacts on the Jomon Landscape" (J. Habu)

"Environment and Socio-Cultural Changes in the Prehistory of Okinawa" (H. Takamiya)

"Discussion"

インダス・プロジェクト報告会のお知らせ

プロジェクトメンバーの皆様にはすでに電子メールで詳細を通知してありますように、8月27日(金)、28日(土)にインダス・プロジェクトでは、毎年恒例となっております報告会を地球研の講演室にて開催いたします。開催時間は27日が13:00-17:30、28日は19:30-16:30となっております。

今年もインドやパキスタン、アメリカ、スペインから来日された外国人研究者から報告が寄せられる予定です。地球研の日本人メンバーによる報告もごさいます。南アジアの最新の遺跡情報が得ることができる場ですので、時間の都合がつく方は是非ご参加下さい。

招聘外国人研究者のご紹介

今年度も2名の招聘外国人研究者がインダス・プロジェクトに来日されております。アメリカのワシントン州立大学からS. A. ウェバー (Weber) さんが6~8月の3ヶ月間、インドのビルバル・サハニ・古植物学研究所からA. K. ポーカリヤー (Pokharia) さんが7~9月の3ヶ月間滞在されております。

両名とも植物考古学がご専門で、インダス・プロジェクトで発掘したファルマーナー遺跡とカーンメール遺跡の植物遺存体の分析を担当されております。今年度末刊行予定の両遺跡の発掘報告書作成に向け、彼らと議論を重ねております。どうぞよろしくお願いたします。



Steven A. Weber さん



Anil K. Pokharia さん

編集後記

ニュースレター第7号をお送りいたします。この度も発行が遅れてしまい、申し訳ありません。今回は昨年度末にインド、グジャラート州ブジで開催された日印共催の国際会議の特集となっております。ご寄稿いただいた方々に篤くお礼申し上げます。

京都は蒸し暑い日が続いておりますが、発掘報告書作成に日夜励んでおります。今年度末の刊行をお待ちください。(遠藤 仁)

インダス・プロジェクト ニュースレター
第7号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹
編集・発行 インダス・プロジェクト
発行日 2010年8月5日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>

インダス・プロジェクト ニュースレター

第8号

2011年8月5日発行

ごあいさつ

インダス・プロジェクトがプレ研究 (PR) としてスタートしたのは2006年のことです。そして、2007年4月からは本研究 (FR) となり、本年度は早くも最終年度となってしまいました。振り返ってみると、インダス・プロジェクトは茨の道でした。とくに、本研究となるまで、一度は評価委員会でのゴーサインが出ず、もうプロジェクトはあきらめようかと、弱気になったこともありましたが、しかし、2007年に本研究をはじめから、本プロジェクトでの成果にはめざましいものがあり、おかげさまで最終年度まで続けることができました。これも皆様のご支援ご協力のたまものです。

ご存じのように、インダス文明遺跡の発掘をインドで2カ所行いました。ハリヤーナー州のファルマーナー遺跡では墓地がみつき、インドで大々的に報道されました。グジャラート州のカーンメール遺跡では、インダス印章が押印された同型のテラコッタ・ペンダントが3個もみつき、それが科学雑誌『サイエンス』に掲載されました。その写真が今度は『南アジア考古学2007』(ラヴェンナで開催された学会で発表した論文集)の表紙を飾ることになりました。ファルマーナー遺跡発掘報告書は本年3月に出版することができました。また、カーンメール遺跡発掘報告書も最終段階に入り、遅くとも10月には発刊の運びとなりました。これらは上杉さん、寺村さんたちの努力のおかげです。

物質文化研究グループだけではなく、古環境研究グループの活躍もすばらしいものでした。3月にはアメリカ地球物理学連合 (AGU) の特別セッションである、チャップマン会議に参加し、ポスターセッションに、前空さん、宮内さん、奥野さん、三宅さんの4名が、口頭プレゼンテーションでは横山さんのところの大学院生中村君と長田がそれぞれ発表しました。その発表の成果

がサイエンスに報告され、前空さんの発表が紹介されました。そして、4月にはヨーロッパ地球科学連合 (EGU) で前空さんと長田が発表し、さらに7月には世界第四紀学会 (INQUA) に前空さんと長田が参加しました。これらはコアメンバーの前空さんをはじめとする古環境研究グループのおかげです。

さらに、生業研究グループにも、新しい発見がありました。インド矮性コムギはインダス文明遺跡からも発見されている古いコムギです。そのコムギは緑の革命以降、なくなってしまったと考えられていましたが、それがまだ栽培されていることがわかったのです。それは大きな成果なので、地球研と報道機関との懇親会で発表したのですが、残念ながら、3月11日の東日本大震災直後だったため、新聞等での発表はありませんでした。今回のニュースレターは大田正次さんと千葉一さんが生業研究グループでの研究成果の一部を報告してくださいました。フィールドワークの達人である、千葉さんならではの記述をぜひ皆さん楽しんでください。

こうした皆様の研究成果をうけて、2月に行われた評価委員会では大変高い評価でした。皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

この最終年度にあたり、プロジェクト研究員だった上杉さんと寺村さん、プロジェクト研究支援員だった園田さん、事務補佐員だった河村さんが地球研から離れることになりました。本当にお世話になりました。ありがとうございました。河村さんに代わり、かつてインダス・プロジェクトが苦しい時代に事務補佐員を務めておられた長谷さんが最終年度の事務を担当していただきます。長谷さん、どうぞよろしくお祈りします。

苦しかった時代を忘れず、謙虚にプロジェクトの成果をみつめ、最終年度が無事終わることを祈って、巻頭言とします。

プロジェクトリーダー 長田 俊樹

インダス文明を支えた幻のコムギを求めて

大田正次（福井県立大学生物資源学部）

インド矮性コムギ (*Triticum aestivum ssp. sphaerococcum*) は、アラビア半島とパキスタン南部、インド北西部でのみ栽培された記録のある普通系コムギの1亜種で、この地域でパンコムギ (*T. aestivum ssp. aestivum*) から生じたと考えられている。考古学的には、インダス文明以前、インダス文明期、および歴史時代初期の遺跡からパンコムギとともに出土し、インダス文明期の主要な冬作穀類の一つであったと考えられている。しかし、1960年代に始まった「緑の革命」によるコムギ多収品種の導入により急激に栽培がなくなり、現在の栽培の状況は不明であった。2010年2月、総合地球環境学研究所プロジェクト「環境変化とインダス文明」生業研究グループのメンバーである森直樹（神戸大学大学院）と千葉一（東北学院大学）が、カルナータカ州とマハーラーシュトラ州の州境に近い3つの村でインド矮性コムギが今なお栽培・利用されていることを再発見し、種子とさく葉標本を収集するとともに聞き取り調査を行った。

一方、エンマーコムギ (*T. turgidum ssp. dicoccum*) は、今から約9千年前に一粒系コムギ (*T. monococcum ssp. monococcum*) とともに西南アジアで栽培化され、初期の新石器麦農耕の重要な要素であった難脱穀性のコムギで、現在では、易脱穀性のマカロニコムギ (*T. turgidum ssp. turgidum convar. durum*) やパンコムギに置き換わり、地中海・西南アジアやヨーロッパではほとんど栽培されなくなった。インド北西部およびパキスタン南部ではインダス文明以前（前5千年紀～3千年紀）の遺跡から出土する。生業システム研究グループのこれまでの現地調査で、インドではタミル・ナードゥ州北部からマハーラーシュトラ州にかけての西ゴート山脈東麓に沿った高原地帯で、今でも広く栽培・利用されている

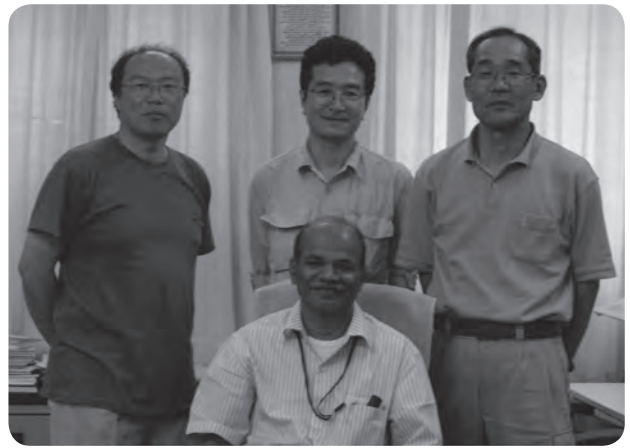


図1 デカン大学考古学研究所でシンデー教授とともに後列左から、千葉、森、大田

ことが確認されている。

今回、インド矮性コムギの新たな栽培地域と情報を求めることを中心に、エンマーコムギについてもさらに情報を得ることを目的として、冬作物の収穫期に現地調査を行ったので、フィールドノートとGPSの記録をもとに報告したい。3月4日に日本をたちムンバイ (Mumbai) に一泊したのち3月5日にプネー (Pune) に移動、先にインド入りしていた千葉一さんと合流し、デカン大学考古学研究所のシンデー教授の協力を得て、大田、千葉さん、森直樹さんとガイドの大学院生シュレイヤス (Shreyas) 君の4名で、3月6日から3月9日の4日間マハーラーシュトラ州とカルナータカ州の州境地帯を調査した (図1)。その後、3月10日午後プネーからムンバイに移動、ムンバイから3月11日に帰国した。調査日程と調査ルートは表1と図2に示したとおりである。また、インド矮性コムギあるいはエンマーコムギの情報とサンプルを得た地点を表2と図2のポイントで示した。

調査1日目 (3月6日曜日): プネーからビータ (Vita)
プネーから南下し、サタラ (Satara) で高速道路を降りた。高速道路の料金所では子供たちが濃い赤色を

表1 2011年3月の生業システム研究グループの調査ルート

年月日	調査ルート
3月4日 (金)	Osaka — Mumbai
3月5日 (土)	Mumbai — Pune
3月6日 (日)	Pune — Satara — Koregaon — Mhaswad — Malshiras — Mhaswad — Vita
3月7日 (月)	Vita — Khanapur — Karanj — Jarandi — Kavathe Mahangal — Jath — Amurtvadi — Jath
3月8日 (火)	Jath — Gherdi — Jath — Bijapur — Motevadi — Bijapur
3月9日 (水)	Bijapur — Masavinala — Basabana Bagebadi — Jamukhandi — Madrakhandi — Satti — Sangli — Pune
3月10日 (木)	Pune — Mumbai

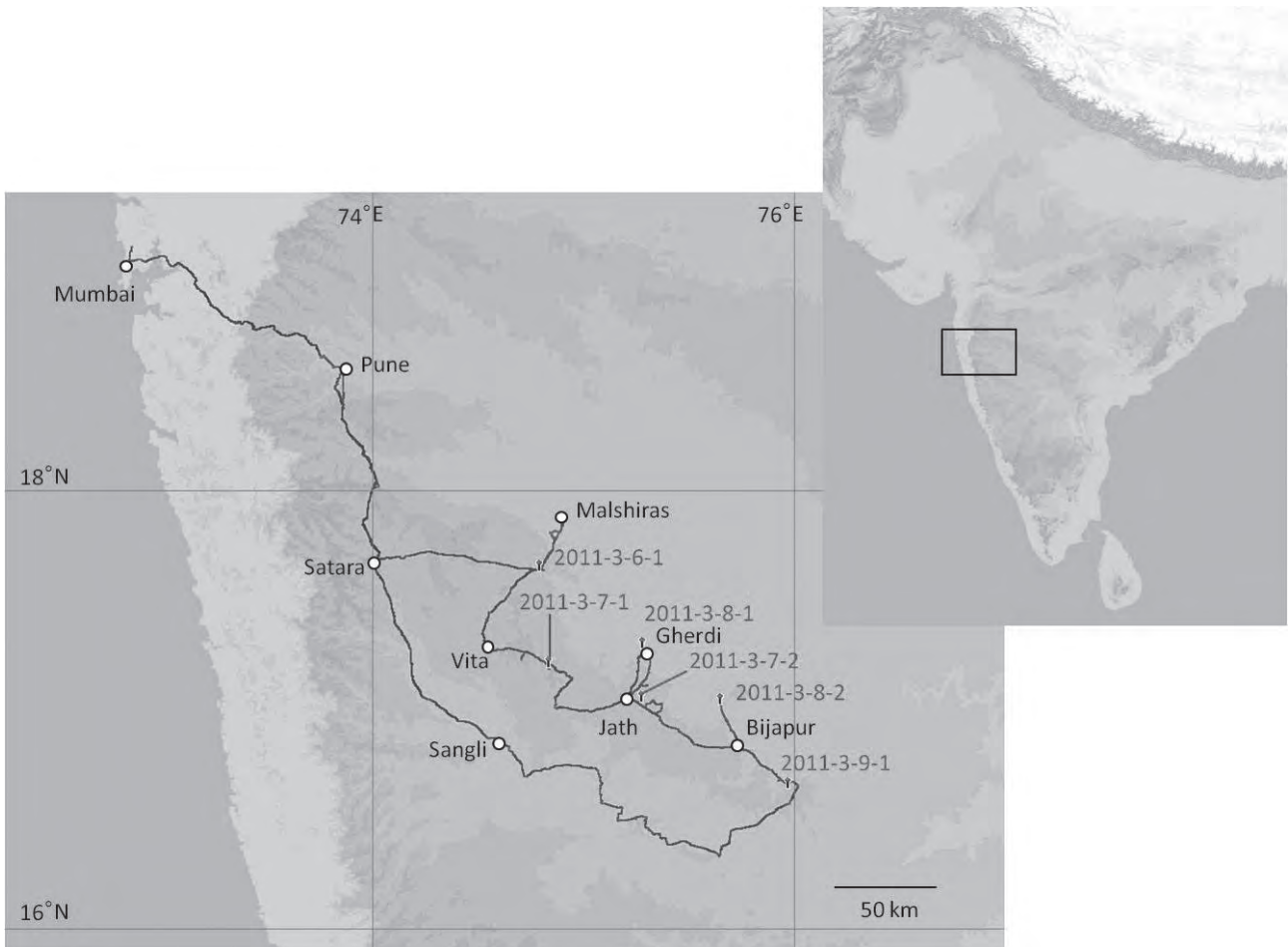


図2 2011年3月の調査ルートと採集地点

したイチゴを売っている。東へと向かい、マスワード (Mhasvad) の穀物商でインド矮性コムギについて「背が低くて粒が丸い」をキーワードに聞いた。作物の名前は知らないが作っている村を教えてくれた。ついでに、エンマーコムギ (khapli) について聞いてみると、即座に「ある」と答え、店の奥に置いてある袋から小穂を取り出して見せてくれた (調査地点 2011-3-6-1)。情報をもとに、マスワードから北のマルシラスへ向かったが、インド矮性コムギはなかった。また、確かな呼称も聞くことはできなかった。マスワードに戻り、昼食後、ビータをめざした。途中の村でインド矮性コムギについて聞き込みをしたところここにはないとのことだった。

乾季のインドを訪れるのは今回が初めてである。1日目の行程を終えて、雨季とはまったく違った印象をもった。想像以上に暑く乾燥しており、まるで、夏のトルコやサハラから熱く乾いた風が吹く夏のモロッコと勘違いしそうである。景色もまた、こげ茶色の土にハネガヤが枯れて、思わずコムギの野生種を探してしまいそうになる。収穫期の熟れたコムギやモロコシ、ヒヨコマメ、ザクロとブドウの果樹園。ナンキンマメは植えた直後

から花を咲かせる畑までである。車窓から頻繁に見られるサトウキビ畑を除けば、西南アジアの麦農耕の風景そのものようだ。

調査2日目(3月7日月曜日):ビータからジャット(Jath)

標高約700mのビータの夜は涼しく快適だった。今日はさらに東へ進みジャット周辺で調査する予定である。昨年2月の調査で、千葉さんと森さんがインド矮性コムギを見つけた地域に近づいていく。カナプル(Khanapur)の南の村(標高約860m)で聞きこむが、インド矮性コムギについて情報はなく、エンマーコムギ(khapli)は水が利用できないため作れないとのことだった(図3)。カナプルへ引き返し、ウプマとポハの朝食。ポハはインド風ドライカレー。

カナプルを出てすぐ、カランジ(Karanj)村でコムギを収穫していた女性に話を聞いた。植えているのはパンコムギ(品種はLokwan)とマカロニコムギ。パンコムギはディパワリのあとに播き、マカロニコムギはディパワリに播いた。チャパティ、プーリ、シュワイを作る。ウプマはときどき作る。



図3 カナブル近くの乾いた風景



図4 ジャット近くアムルトウワディ村のエンマーコムギ畑での聞き込み

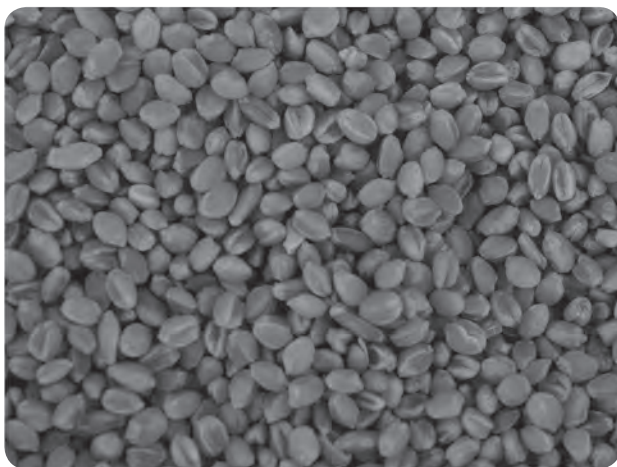


図5 モテワディ村の農家で出してもらったインド矮性コムギの種子



図6 ゴル・グムバズの回廊からビジャプル市内を望む

ジャランディ (Jarandi) 村の街角での聞き込みで、エンマーコムギ (khapli) を栽培している人がいた。案内してもらった畑の穂はまだ青く、ディパワリのあと11月15日に種を播きあと半月から1ヶ月で収穫できるという(調査地点 2011-3-7-1)。昔は縦杵 (musal) と石臼 (ukal) でエンマーコムギの穎を取り除いていたが今は機械でやっているそうだ。エンマーコムギから極細麵シャービゲを作るという。

ジャットの300ルピーのホテルに午後1時にチェックイン、昼食後、東の地域を調査した。ジャットから約6kmのアムルトウワディ (Amurtvadi) 村の道路沿いにエンマーコムギ (khapli) の畑があった(調査地点 2011-3-7-2)。通りかかったオーナーに話を聞いた。祖父と父も作っていた。ディパワリのあとに種を播き、これから15日後に収穫する。自家消費と売るために作っており、コムギの中では最も高く売れる。チャパティ、シュワイなどを作る。エンマーコムギを収穫したあとに

はワタを植える(図4)。

ジャットに戻り夕食。珍しくレストランに酒があり周りは酔っ払いだらけ。にわかベジタリアンの日本人には少しづらい。きれいとは言い難いホテルの部屋は停電中。多めに炊いた蚊取り線香の煙が目にしみる。今日は、標高700~800mの高原を走った。前日同様に非常に暑く乾燥していた。エンマーコムギ (khapli) の栽培を2ヶ所で見したが、いずれも水が豊富に利用できることが必要。アムルトウワディでエンマーコムギのあとに植えるワタも水がたくさん必要な作物である。

インド矮性コムギは今日も名前すら出てこなかった・・・。

調査3日目(3月8日火曜日): ジャットからゲルディ (Gherdi) に寄りビジャプル (Bijapur)

5時40分起床。きのう西陽の当たっていた部屋はまだなま温かい。人のいないフロントでしばらく支払いを



図7 ビジャプルの夕暮れ



図8 カルナータカ州マサビナーラ村のインド矮性コムギの畑にて

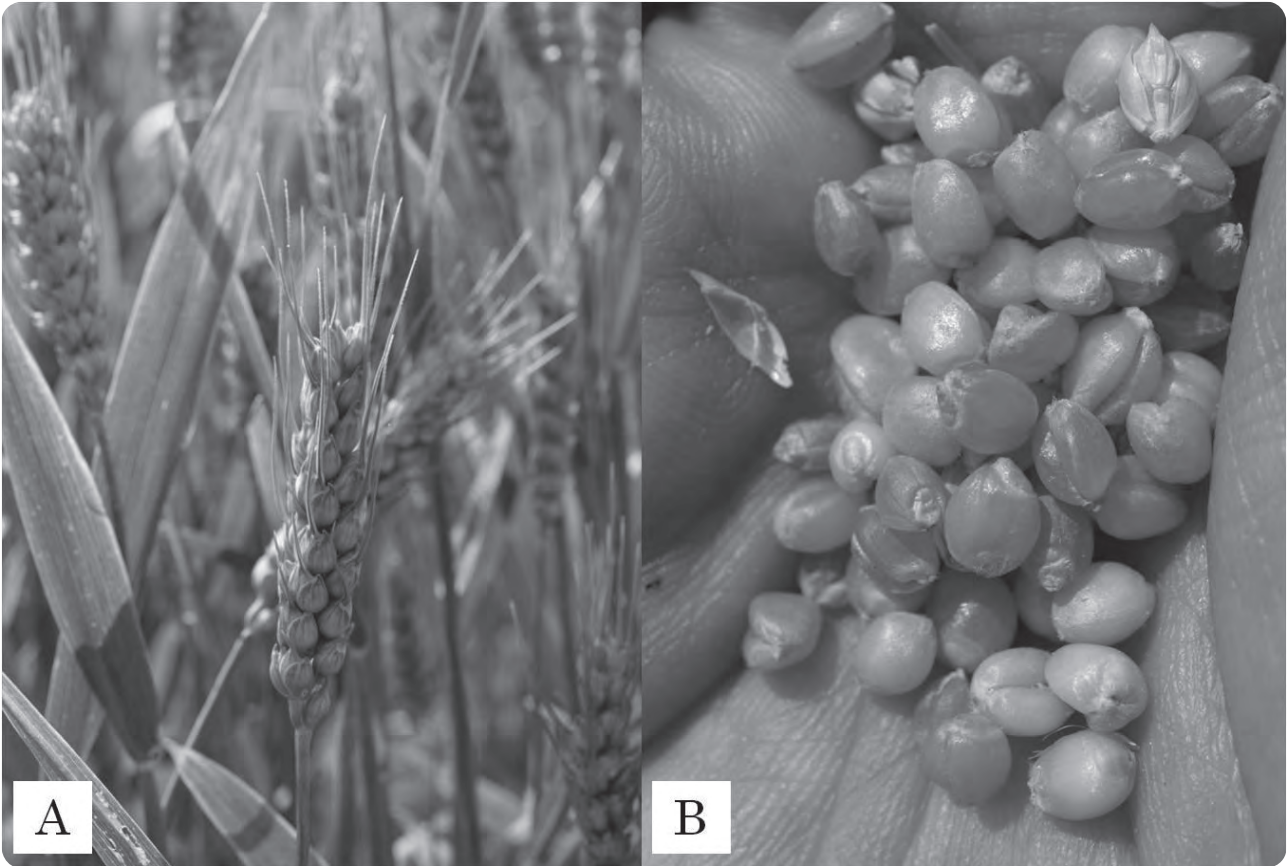


図9 インド矮性コムギの穂 (A) と穀粒 (B)

表2 調査地点と内容

調査地点番号	州	村名	緯度 (° N)	経度 (° E)	高度 (m)	情報
2011-3-6-1	Maharashtra	Mhasvad	17° 38'06"	74° 47'03"	620	穀物商。インド矮性コムギは知らない。エンマーコムギは店にある；呼称 khapli
2011-3-7-1	Maharashtra	Jarandi	17° 11'40"	74° 49'52"	811	街角。インド矮性コムギは見たことも名前も知らない。エンマーコムギはある；まだ青い畑、呼称 khapli
2011-3-7-2	Maharashtra	Amurtvadi	17° 02'16"	75° 16'10"	696	エンマーコムギの畑を見つけて車を止める。オーナーがやってきてサンプルをもらう；呼称 khapli
2011-3-8-1	Maharashtra	Gherdi	17° 17'07"	75° 16'22"	532	町はずれの穀物卸商。インド矮性コムギは知っているが味は良くない；呼称 gundu-godi。エンマーコムギは持っている；呼称 khapli
2011-3-8-2	Maharashtra	Motevadi	17° 01'34"	75° 38'37"	562	インド矮性コムギを昨年作っていた農家。灌漑用のポンプが壊れたので今年には作っていない；呼称 bol-gahu
2011-3-9-1	Karnataka	Masavinala	16° 38'40"	75° 57'47"	605	インド矮性コムギを昨年も今年も作っている農家；呼称 gundu-godi

待ったあと7時過ぎにホテルを出た。ジャットの北30 kmにあるゲルディの穀物卸商で話を聞いた（調査地点2011-3-8-1）。インド矮性コムギは gundu-godi といい、2年前にはあったが味はよくない、穀粒は白っぽい色、とのこと。エンマーコムギ (khapli) は手元にあり小穂を分けてもらった。目の前でしばった水牛の乳で入れたチャイをごちそうになり、ジャットに戻ったのち、カルナータカ州のビジャプルに向かう。

パールホテルにチェックインして昼食、インド矮性コムギを求めて今年の採集地点に向かうことにした。千葉さんと森さんがGPSと景色を頼りにたどり着いたモテワディ (Motevadi) 村の家では、今年はインド矮性コムギ (bol-gahu) を作っていなかった（調査地点2011-3-8-2）。灌漑用の井戸のポンプが壊れたので、たくさん水がある bol-gahu は作らず、パンコムギの品種 Lokwan を作っているという。今年の写真を手渡し、庭先で bol-gahu について話を聞いた。軟質のコムギでウツピットなどいろいろな料理に使い美味しい。15年前に本家からもらって栽培を始め、灌漑用のポンプも10～15年前に購入したとのことだった。家の中から出されてもらった bol-gahu の穀粒にはパンコムギやマカロニコムギ?の穀粒が混じっていた（図5）。

ビジャプルに戻り、ホテルから歩いてすぐの世界遺産のイスラム寺院、ゴル・グムバズ (Gol Gumbaz) を見物する。外国人料金100ルピー、カメラ料金25ルピー。建物の入り口で下足を預け、新婚さん、遠足の高校生（中学生?）、観光客、が狭い急な石の階段を休みやすみ登っている。内部はガランとして味気ないが、外の回廊から見るビジャプル市内は絶景（図6）。ホテルに戻ったところには陽は傾いて暑さも和らいでいた。何とも気だるい夕陽だ（図7）。

今日もインド矮性コムギの栽培にはめぐり合えなかった・・・。

調査4日目（3月9日水曜日）：ビジャプルからプネー

7時45分ホテルを出発したが、町を出たところでパンク修理のためすぐに休憩。「何で夕べのうちに修理しとかないんだ」とつぶやく声。昨日見学したゴル・グムバズが抜き出た大きさと遠くに見える。自転車のパンク修理と同じ作業でのんびりとしかし手際よく修理は進み、8時20分再出発。

ビジャプルの南東のマサビナーラ (Masavinala) で今年のインド矮性コムギ (gundu-godi) の栽培者を訪ね

て話を聞いた（調査地点2011-3-9-1）。初めてみるインド矮性コムギは穂が黄色く熟れ始めていた（図8）。ディパワリのあと11月に種を播いて4ヶ月後、あと10日余りで収穫でき、すべて自家用で美味しい、栽培には水がたくさん必要とのことだった。比較的よく熟れた穂を手で揉んで取り出してくれた穀粒は白く丸く真珠のようだった（図9AとB）。収穫後の畑には5月にトウモロコシを植えるそうだ。gundu-godi の他には、パンコムギ (nil-godi)、マカロニコムギ (jamai)、モロコシ（白い穂の在来種）、ヒヨコマメが熟しており、エンマーコムギ (jave-godi) の穂はまだ少し青く、植えつけたばかりのタマネギが育っていた。

その後、機会を見つけては千葉さんがエンマーコムギとインド矮性コムギについて街角で聞いてみるが、エンマーコムギはあるがインド矮性コムギは見たことがない。昨年秋に調査したサングリ (Sangli) を通り高速道路を飛ばしてデカン大学のゲストハウスに着いたのは夜の11時だった。

まとめ

今回の調査では、残念ながらインド矮性コムギの新たな栽培地域を見つけることはできなかった。エンマーコムギ（マハーラーシュトラ州では khapli、カルナータカ州では jave-godi）は若者でも知っているのに、インド矮性コムギの名前（gundu-godi、bol-gahu）を知っている人はほとんどおらず、栽培しているごく限定された地域の一部の人だけが名前を知っているようだ。インド矮性コムギについて、作っている人は美味しいというが穀物商は美味しくないといい、市場には出ることはない。高値で取引されるエンマーコムギとは違っている。エンマーコムギは現役の作物であるのに対して、インド矮性コムギは以前から栽培が減少し、すでに忘れ去られた作物ということだろうか。我々が見ているのは消えつつある最後の火なのかもしれない。エンマーコムギにはパンコムギで代用しない用途（ウプマやシャービゲ、儀礼食）があるのに対して、特有の用途を持たないインド矮性コムギは、換金作物を夏作物として栽培するために、栽培期間がより短く早く収穫でき、灌漑用水が利用できない所でも栽培できるパンコムギの近代品種に置き換わっていったのかもしれない。

エンマーコムギの利用法と混乱

千葉 一 (東北学院大学)

前回(ニュースレター第5号)では、エンマーコムギ(以後EW)の栽培分布などについて簡単に述べた。今回は、その利用法などについて、主に2009～10年にかけての3回の調査(2009年2月には京都大学の三浦励一さんと、その9月にはチームリーダーで福井県立大学の田正次さんと、2010年2月には神戸大学の森直樹さんと現地で合流した)をもとに、その利用法や呼称などについて述べてみたい。

1. 儀礼食：シャーヴィゲとパーヤサ

2009年2月初頭、カルナータカ州のバツラーリ県に入ると、青い穂をしたEWの畑がサンドゥール郡コンダプル、クードゥリギ郡マハデーワプラ、ハーラサーガラ諸村で次々と現れ、「ブッデゴーディ」という呼称も使われていた。特にバツラーリ県西部のドンガバドゥラ・ダム湖の南側、ハガリボムマナハリ郡からダワンゲレ

県ハラパナハリ郡に向かう道を気軽に50Kmほど車で走るだけで、ウパナーヤカナハリ、ケンチャタナハリ、ピンジャラヘグダール村等々の道路脇の畑にヒョコヒョコとEWが顔を出した。その一つ、クルバ・カースト(羊飼い)多住村のウパナーヤカナハリでは、驚くべき事に、村人の多くが今でもEWを栽培していた。シャーヴィゲ(極細スパゲティ)、パーヤサ(甘いミルク粥)、マーダリ(ロッチェのパン粉・粗糖・ココナッツスライス・過熱半裁したヒョコマメのミックス)などの儀礼食(写真1)だけでなく、チャパティやウピットゥ(挽き割りの固粥)などの日常食でもEWを使うと言う。カルナータカ中部・南部の多くの地域で既に失われてしまったEWの食文化が、ここに遺存していた。

バツラーリ県西部でEWを栽培している農民達は、それを製粉所に持ち込み、加圧式の機械で押し出し、天日乾燥させたシャーヴィゲを自家消費している(写真2, 3)。2010年2月初旬に、森直樹さんとウパナーヤカナハリの隣村アンカサムドゥラ村に入り、EWの栽培を確認した。そこには、洗濯板状の器具を使い、女性二人がかりで行うシャーヴィゲの「手延べ法」が辛うじて残っていた(2009年度成果報告書参照)。「幻のエンマー・

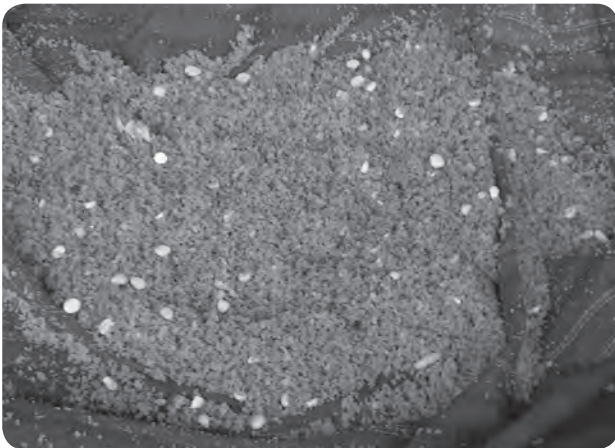


写真1 儀礼食マーダリ、バツラーリ県アンカサムドゥラ(10年)



写真3 製粉所脇のシャーヴィゲ干し場、バツラーリ県H.B.ハリ(10年)

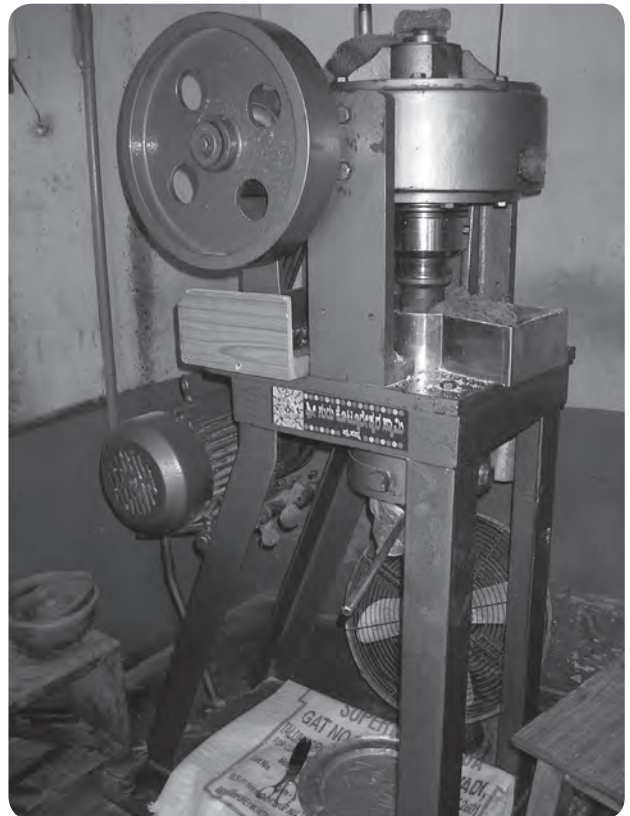


写真2 加圧押し出し式のシャーヴィゲ製造機、バツラーリ県H.B.ハリ(10年)

スパゲティ」とも言えるシャーヴィゲは、バツラーリ県西部の人々にとっては、ユガーディ（正月、太陽暦三月頃）の必須儀礼食シャーヴィゲ・パーヤサに欠かせない。ユガーディを迎える前に、一年分のシャーヴィゲを作るという。気候的にシャーヴィゲ乾燥の適期でもあるらしい。また、このシャーヴィゲ・パーヤサは結婚式など慶事の際にも振る舞われる。現在、市販の袋詰めシャーヴィゲはパン小麦やマカロニ小麦から作られている。都市部では、その非エンマー系シャーヴィゲの油揚げされたものがインスタント食品的に売られている（写真4）。人々はそれに砂糖と暖かいミルクとギー（バター）をかけ、軽食したり、不意の客に供している。儀礼食と菓子の親縁から言えば、シャーヴィゲは確かに日常食へと展開しつつ、即席シャーヴィゲ・パーヤサへと菓子化の方向性も見せている。

パーヤサは粥という古代の調理法を留めている。その内容は地方によって様々で、例えば南部ではアッキ（米粒）パーヤサを、西ガーツではバナナのパーヤサ（写真5）をよく見かける。また西ガーツのコダグ県のユガーディでは、タンビット（ポップライスから作った粉）、バナナ、ヤムやタロ、ココナッツ、ショウガ、ベツラ（サトウキ

ビの粗糖）、カルダモン、乾しブドウ、カシューナッツなどを使った採集・根栽・稲作の多重的なパーヤサが作られる。ココナッツ以下6種の素材は、カルナータカでは主要素材と共にしばしば使われる。それから、緑豆を使ったヘサル・パーヤサ（写真6）も忘れてはいけない。袋詰めのEWの挽き割りなどは、都市部でも容易に入手でき（写真7）、そのパーヤサやウツピットゥは今でも根強い人気がある。ただここでも、それらが急速にパンコムギやマカロニコムギの粗挽きや細挽きに置き換わりつつある。

正月の儀礼食シャーヴィゲ・パーヤサ（2009年度成果報告書参照）には、新穀を粒や挽き割り・粗挽き系の調理で食べるのではなく、製粉技術が進んだ粉食系の調理で食べようとする意図が認められる。デカンの雑穀農耕では、シコクビエ、トウジンビエ、モロコシなどの粉から作られる数種のムッデ（搔い餅）やロツティ（写真8）を日常食としている（アワは炊き粒食しているが、サーマイやコロローは食べたことがない）。その点から言えば、シャーヴィゲは儀礼食としてはちょっと特異であり、デカンの粉食としても特異かも知れない。南インド沿岸部稲作地帯や西ガーツで、コメのカイモチから作られる



写真4 油揚げしたシャーヴィゲ、バンガロール市のシティー・マーケット（08年）

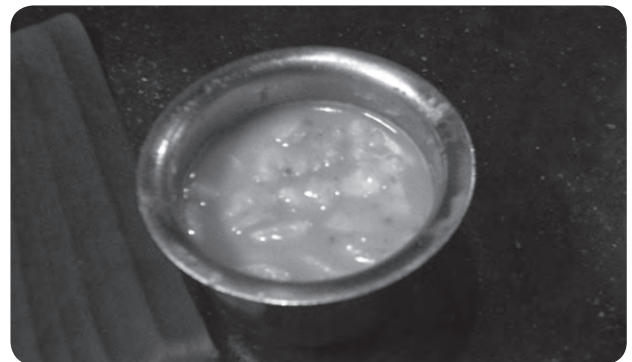


写真5 バナナのパーヤサ、ダクシナカンナダ県ダルマスタラ近郊（08年）



写真6 ヘサル（緑豆）パーヤサ、バツラーリ県ジゲナハリ（09年）



写真7 挽き割り EW の袋詰め タミル語のサンバゴーディという発音がカンナダ文字で表記されているバンガロール市内 (10年)

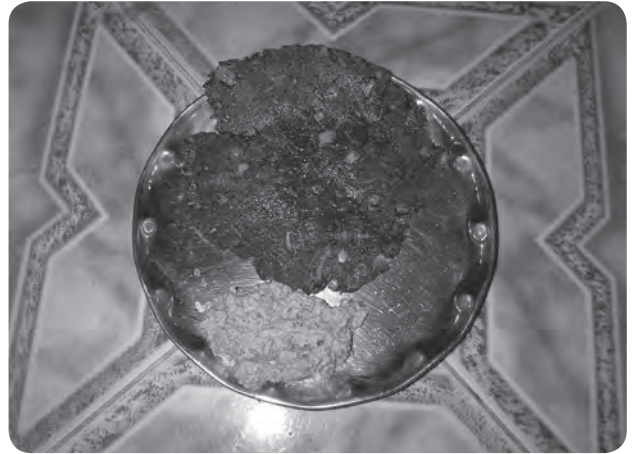


写真8 ラギー (シコクビエ) ロッティ、バターリ市 (09年) これとアッキ(米)ロッティの場合にタマネギや唐辛子などがミックスされる



写真9 アッキ (米) ムッデ (掻い餅)、ココナツミルクが混ぜてあるバンガロール市 (10年)

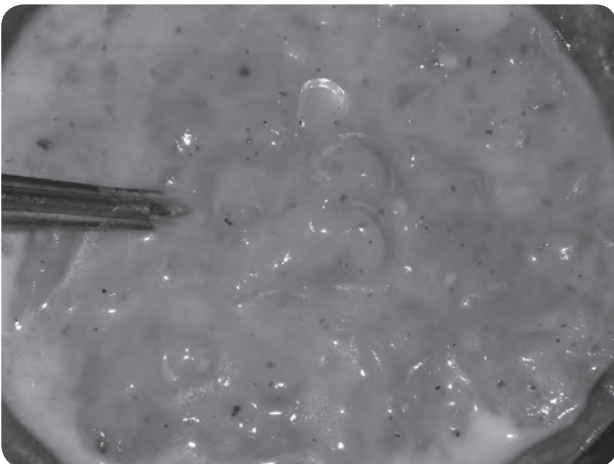


写真11 EW の粒粥パーヤサ、バーガルコトウ県アルマティ近郊 (10年)



写真10 真鍮の組み立て式押し器で、アッキムッデから米のシャーヴィゲを作るバンガロール市 (10年)

麵ヌー puttou (地域によってはこれをシャーヴィゲと呼ぶ場合もある) との関連も、確かに無視できないと思う (写真9,10)。

バーガルコトウやベルガムなど北カルナータカ諸県では、EWの粒粥パーヤサ (写真11) が目立つ。とは言っても、シャーヴィゲが持つ吉祥観が薄れている訳では決してなく、婚約などの慶事にカラフルなシャーヴィゲ・

セットが贈り物とされている (写真12)。その色彩から、出血儀礼による超自然的力の感染を模倣するホーリー的招福を見るのは深読みかも知れない。しかしそのアレンジされた形状から、箒による除災、コムギ収穫の最後の一束を手にした霊的女性、三つ編みの髪が匂わせる供犠の記憶に辿り着くことは、それほど無謀なこととも思えない。シャーヴィゲをめぐる粉食と儀礼食間の若干の齟



写真 12 贈答品シャーヴィゲのモノツクリ・セット、ベルガム県
ベルガム市（11年）

齧は、おそらく EW という素材の問題を超えた、年越し蕎麦的、あるいは類感・モノツクリ的な形式・形状の問題なのかも知れない。

上記の採集・根栽・稲作・麦作などの多様な素材とそれらに付随する霊的観念を、このパーヤサという粥が歴史的に包み込んでいる（イネ科の雑穀を使ったパーヤサは食べたことがない）。しかしその特徴として忘れてはならないのは、極めてアーリヤ的なミルクとトッパ（ギー、バター）がスッポリと上から包摂（あるいは侵略・外発的）する様に、それらの素材を仕上げている事なのだ。一方、視点を反転させれば、陰に追いやられた南インド古代食の抱擁力か、一見調味・脇役的なショウガ系やヤシやサトウキビ、カシューなど採集・根栽類が下から包摂（受容・内発的）するかの如く、パーヤサを仕上げている様にも見える。生業、あるいは農耕文化それぞれの前後関係についてはよく知らない。でも、コメやコムギを挟んだアーリヤとドゥラヴィダの関係が、パーヤサと言う儀礼食の中に垣間見える様な気がする。

2. 女の分限と穀霊観

2009年2月4日、チットウラドゥルガ県モラカールムール郡ウエンカタプラ村を三浦励一（京都大学）さんと訪れ、丁度に EW の収穫作業を見ることができた（ニュースレター第5号参照）。「まだ二月になったばかりというのにもう収穫！」。聞けば、播種から収穫まで三ヶ月余りだと言う。確かに、ニルギリのバダガ族のケースも、カルナータカ州トウクール県マドゥギリ郡諸村のケースも同様だったと思う。デカン高原の EW は、雑穀（夏作）を基本としたサバナ農耕の冬作で行われている。大田正次さんによれば、そうした短期冬作という環

境に適応した極早生という生理的特長を、デカンの EW は持つに至ったと理解できるらしい。

ウエンカタプラ村では、EW の収穫作業は女性に限定されていた。収穫早朝には防災儀礼的なチャラガ（飯やヨーグルト等などのミックス、しかしその内容物は祭りによって大きく異なる）が撒かれる。また、脱穀場で小穂の小山に若水がかけられ、箕にホーリゲ（ヒヨコマメ or キマメ+粗糖の餡を仕込んだ薄でのお焼き）等の供饌がなされるという。このように EW の収穫には諸儀礼が付随すると言うが、実見は適わなかった。また、畑に案内してくれた男達に刈入れについて尋ねると、「女たちが静かに丁寧に扱わなければならないもの…」と言う。「穂軸の折落の恐れ」や「穀霊逃亡観」や「女性と同一視される穀霊のジェンダー」などの問題が凝縮されていたように思われた。こうした女性による EW の刈入れの専管は、地域によってはだいぶ乱れている現状がある。しかし、男女が共に収穫作業を行う場合でも、その家の主婦が先ず始めに儀礼的な刈入れを行った上で、本格的な作業が開始されるケースもあり、本来的に「女の分限」とする意見が多かった。

2009年2月13日、北部カルナータカのビジャプル県ドーナール村を訪れた際、刈入れや脱穀の開始に先立って行われる「五人の既婚女性の歓待」儀礼を見ることが出来た（ニュースレター第5号参照）。残念ながら EW ではなく、冬作モロコシとマカロニコムギの脱穀だったが、EW においても同様の歓待がなされるという。畑の所有者も五人の既婚女性たちも、皆リンガーヤタ・カーストだった（リンガーヤタは、シヴァ神の五面に由来する「五」という数字によって構造化されている）。歓待後、手伝いの人々は五人の女性の足に触れナマスカーラし、作業に取りかかる。綺麗なサリー姿で正装した五人の女性（穀霊）たちも、儀礼的に少しだけ脱穀を手伝う真似をした。この時の歓待の儀礼食は、たっぶりのミルクとギーをかけたマカロニコムギのホーリゲだった（写真13）。そのマカロニコムギの刈入れにおいても、家の主婦が始めに儀礼的に刈り取り、また落穂拾いも女の分限とされていた。マカロニコムギを生産する農家の主婦に聞いたところ、「食べて最も力がつくのは、ジャーワリー・ゴードィ（マカロニコムギ）だ」と言い、朝食に食べ切れない程のジャーワリー・ウッピットゥ（写真14）を作ってくれた。ビジャプル県は、カルナータカの EW 生産の中心と考えられるが、マカロニコムギの生産でも有名で、EW の利用法の多くがマカロニコムギで置き換



写真 13 マカロニコムギのホーリゲ、ビジャプル県ドーヌール (09年)



写真 14 マカロニコムギのウピットウ、ビジャプル県ドーヌール (09年)

えられつつある。それは穀霊観にも及んでいると思われる。

3. エンマーコムギのトライアングル

北部カルナータカに北上し、2009～10年にかけての三回の調査で、バーガルコトウ県ビーラギ郡コルティ村、グルバルガ県アラランダ郡ジャワラギ村、ビジャプル県バサワナバゲワディ郡諸村(バサワナバゲワディ、マツリカルジュナバナロッチェ、マサヴィナーラ、タレワードゥ)、ビジャプル郡ポーシェ村でEWの栽培を確認した。2007年秋からのタミルナード山岳部の調査開始から、初めてEWを市場出荷しているという生産者達がここで現れ始めた。また、ビジャプル市内のネルー・マーケットの穀物商の多くが、近郊農家で栽培された地物のEWを扱っていた。誰もがEW生産の縮小傾向を口にしたが、ビジャプル県ではかなり広範な栽培と需要が存在していると思われる。

更に北上を続け、調査はマハーラーシュトウラ州南部に突入しようとした矢先の2009年9月1日、私はウイルス性の風土病チクングニアに倒れてしまった。高熱と関節痛、そして全身が赤く発疹した。後で知ったが、治療法はなく自然治癒に任せる他ないが、重症化する危険もあると言う。見舞いに来た友人が言うには「それは東アフリカから来たチキングンヤだ。去年、自分の村でも多くが罹った」と。ポーとした意識の中でそれを聞き、自分がニワトリにされてしまった様な憂鬱な気分が襲われた。同時に頭の隅で「そうか、東アフリカか。アラビア海を渡るなど造作もないのだな」と思った。その一週間後、私は何とか立ち上がり、調査続行のため列車を乗り継ぎマハーラーシュトウラ州のプネー市へと向かっ

た。しかし下半身の関節の痛みは増し、まともに歩けない状態のまま、デカン大学で大田正次さんと合流。ご面倒をかけながらのマハーラーシュトウラ調査となってしまった。足首の関節の痛みが消えたのは、一年以上が経過した翌年の初冬だった。

大田さんとマハーラーシュトウラ州南部の村を訪ねた9月13日、プネー県バルマティ郡ムダレ村で「カプル」と呼ばれる黄色のEWを確認した。その後も、カルナータカ州と境を接するコルハプル県とサングリ県を調査した。コルハプル県シャホワアディ郡サルードゥ村、ハートウカンガレ郡ヘーラル村、シロン郡タムダラゲ村で、「カプリ」あるいは「カプリガーフ」と呼ばれるEWの栽培を確認した。儀礼食をはじめコムギ料理にEWを常用していた。サングリ県ミラーージュ郡マヒサーレ村では、生産者によっては今でも市場向けのEW栽培をしていると言う。2010年2月の森さんとの調査でも、サングリ県ジャトウ郡グルグンジャンル村、バルガオン村やソラプル県の州道一四一号线沿いの畑の数カ所でEWを確認した。カンナダ語も通じるジャトウ郡には、州境を越えてビジャプル市にEWを出荷している生産者もいた。

管見の限りでは、EW生産者の厚みとその規模、市場出荷、儀礼食のみならず日常の消費レベルにおいて、マハーラーシュトウラ州南部からカルナータカ州北部の地域は、タミルナード山岳部やカルナータカ中・南部とは明らかに異なっている。それは遺存的栽培の域を越えた「EW大国」の出現と言っても過言ではない。バナナやサトウキビなどの商品作物栽培優位のマハーラーシュトウラ州北部の調査では、EWを確認できなかった(写真15)。現時点において、この地域(特に、北:プネー県、西:コルハプル県、東:ビジャプル県に囲まれたトライ



写真 15 広大なバナナ農園で働く人々、マハーラーシュトラ州
北部のバルガオン県 (09年)



写真 17 ランバーニの女性、パッラーリ市 (09年)

アングル) をインドのEW生産のコアと見なし得るかも知れない。

マハーラーシュトラでは、ディーパワリの1か月前の新月に、ガタスタープナ (2009年度成果報告書参照) と呼ばれる播種儀礼が、農民層だけでなく、都市住民の間でも広く行われている。その内容や様式に地域差はあるが、冬作の播種期と重なっており、使われる多様な穀



写真 16 ガタスタープナ儀礼に使われる穀粒 (この場合、EW・
オオムギ・米・トウジンビエ・シコクビエの5種)、ブネー市の
ラクシュミー・マーケット (09年)



写真 18 神棚になされた冬作物の穂掛け、ビジャプル県マサビ
ナーラ (11年)

や豆の中でも、EWは必須のものと思われる (写真 16)。この播種儀礼には「作占い」の性格があるが、勿論「豊作祈願」(富財増殖・除災招福)が含まれている。また地域によっては、「モノツクリ」、「性的類感呪術」などの関連要素も確認できる。このガタスタープナは、カルナータカ州北部のグルバルガ県でも行われている。精査すれば、他の北部県ビジャプル、ベルガムなどでも確認

できるかもしれない。また、それと類似した「ティス」あるいは「ソスイハッパ」(苗祭)と呼ばれる播種儀礼が、グジャラートを故地とするランバーニ(写真17)の人々などに伝わっているという。また北カルナータカには、古代の収穫祭「穂摘み祭り」の始食を思わせる「焼き小麦」、その半熟焼き小麦から作るチャパティや、コムギなど数種類の冬作物(ベニバナ、カラシ、ヒヨコマメ、冬モロコシなど)を青刈りした束を、戸口や神棚に「穂掛け」する風習も見られる(写真18)。人によっては、こうした利用においてEWの使用を証言してくれたが、未だ実見を果たしていない。

面白いことに、この三角形のエリアの中で、カルナータカ州ビジャプル県バサワナバゲワディ郡とマハーラーシュトウラ州サングリ県ジャトウ郡の三つの村で、インド矮性コムギの栽培を確認した。しかしそれはかなり遺存的なもので、2011年3月に大田さん森さんと三人で、このトライアングルを駆け巡ったが、他に確認することはできなかった。「数年前まで栽培していた」という情報は確かに存在する。個人的には、カルナータカ州のバーガルコトウ県に遺存の可能性は残されると感じている。

4. 呼称の混乱

栽培型小麦の用途分化という点から見ると、食糧としての難脱穀性(一粒系、EW等)コムギは次第に易脱穀性(マカロニ、パン等)コムギに置き換わり、ヨーロッパのように飼料用へと零落し、他のムギ類と混同され、その名も忘れ去られる傾向にある。しかしそうした事情は、決して他人ごとではない。例えば、マハーラーシュトウラ北部で「カプリ(EW)」と尋ねても「知らない」と、カプリの写真を見せても「これはマカロニコムギだ」と言う人々もいた。似た様な状況はカルナータカにも当てはまり、EWは両州において必ずしも一般的に認知されている訳ではない。

EWを意味する呼称の裏には、かなり興味深いモノが秘められているかも知れない。例えば、黒海に近いトルコ北部では、一粒系コムギとEWの双方を「kaplica(カプリジャ)」と呼んでいる(大田2010)。マハーラーシュトウラの「khapli」と明らかに酷似しており、何らかの関係を匂わせる。また、「ジャヴェゴードィ」というEWの呼称は、カルナータカでは割と広範囲で通用する。しかし、その呼称で各地の農家や市場などを尋ねてみると、しばしばマカロニコムギが出されることがあった。マカロニコムギの呼称にもいくつかある。「ドッダ

ゴードィ」「バンスイゴードィ」、中でも広く使われているのが「ジャーヴァーリゴードィ」で、「伝統種のコムギ」という意味になる。しかし人によっては、「本当のジャーヴァーリゴードィはジャヴェゴードィのことだ」とも言う。近代的な高収量品種との関係の中で使われ出した呼称とは思われるが、「ジャヴェ=ジャーヴァーリ」という認識のその軸足が、いつの間にかEWからマカロニコムギへとスリップしている。確かに北部カルナータカ州ではマカロニ小麦の生産も多く、日常食、儀礼食を問わず使われるケースも多い。その祖先種である難脱穀性二粒系のEWは、易脱穀性二粒系のマカロニコムギに母屋も看板も取られた格好になっているようだ。これも、後発のものに同化されながら、EWがその呼称を失い忘れ去られて行く一コマなのだろうか。

2009年3月7日、バツラーリ県バツラーリ市の穀物商カールワ・アッチャイヤナ・アンガディで「ジャヴェゴードィ」を注文すると、「食べるジャヴェゴードィはない、食べないジャヴェゴードィならある」と言われ、出されたものは皮性オオムギだった。ブラーミン(司祭階級)がホーマ(護摩行)に使うという。店主はこれを「コムギ」と言って譲らなかった(実際にF.キッテルのカナダ語辞典を見る限り、javegoodhiはオオムギと記され、EWは存在しない事になっている(Kittel 1994))。どうやら「ジャヴェゴードィ」には、「穎が固く張り付いた皮性オオムギ」と「固い穎に包まれたEW」と言う更なるカテゴリーの混乱あるようだ。この事は、カナダ語の問答式歌遊びの定形からも窺える。「aane aane, yaava aane? kaaDu aane, yaava kaaDu? suDugaaDu, yaava suDu? roTTi suDu, yaava roTTi? jave roTTi, yaava jave? tinno jave, yaava tinno? eeTu tinno!」(バツラーリ県クードウリギ郡グデコーテ村にてG.Shashikiran氏から採録)。訳は「象象、何の象? 森の象、何の森? 焼く森(焼畑)、何を焼く? ロッティ(無発酵パン)を焼く、何のロッティ? ジャヴェロッティ、何のジャヴェ? 食べるジャヴェ、何を食べる? 一発食らえ!(と殴る振り)」。食用ではないジャヴェゴードィの存在が窺える。つまり現在のカルナータカ州で、「ジャヴェゴードィ」という呼称においてEW、マカロニコムギ、皮性オオムギの三つを意味する混乱が存在している。

カルナータカ州でオオムギ畑を実見した事はなく、稀に売られている皮を剥いたオオムギを、人々は英語同様に「baarli」、あるいは「バールリゴードィ」と呼びコムギ扱いし認識が薄い。しかしその用法を尋ねると、病人

食としての「葉食い」で「パーヤサとして食べる」という。また飼料としてやると「牛の乳の出が良くなる」とも言う。人々が、この「パールリゴーディ」と「食べないジャヴェゴーディ」をどのように弁別理解しているのか疑問は尽きない。しかし、ミルクングやヴェーダ祭式などを伴ったアーリヤ文化の一つ、あるいは皮性オオムギに対する特別な観念と呪術的用法という小伝統が、ドゥラヴィダ文化の中に突き刺さる様にして生きている。それはヴェーダの祭式との関係において、強固に需要されながらも、南インドで皮性オオムギがコムギとして生きて来た事を物語る。しかしその物語には、幾通りかの前史がありそうだ。

カンナダ語の「javegoodhi」という言葉は、もとはサンスクリット語から借用した「java（オオムギ）」と「godhuuma（コムギ）」の二語の複合と理解できる（Apte 1986, 長田 1995）。直訳すれば「オオムギの様なコムギ」という事になる。難脱穀性などの特徴から、EW がアーリヤ人によって「オオムギの一種」と認識されたのかも知れない。EW が南インドで多用な儀礼食の素材として使われて来た事は既に述べた。更には、埋葬での邪鬼払い、村境での道切り、播種儀礼、穂掛け、サリー着の儀礼（成女式）、食い初め（離乳食）、ルドゥラアビシェーカと呼ばれる特別なリング崇拜などの諸儀礼にも、EW は伝統的に使われて来た。そうした南インドにおける儀礼用穀物としての EW の実体が、アーリヤ文化におけるホーマ（護摩行）など儀礼に使われる皮性オオムギと同置されたのかも知れない。「オオムギだ!」「コムギだ!」で口論した店主が分けてくれた一握りの皮性オオムギを、翌日じっくり観察すると EW の小穂が混入していた（ニュースレター第 5 号）。かつてこの二つがアーリヤ的に同類と見なされ、混作されていた名残りか。あるいは、それらが地域によっては家畜飼料として扱われている現状、両者の零落した姿だろうか。

実は、「yavagodhuuma」という複合語は、実際にサンスクリット文献に存在するらしいく、東北大学でインド学を専攻する西村直子さんによれば、yavagodhumavat-「オオムギやコムギのような」は叙事詩ラーマヤナに、yavagodhumaja-「オオムギやコムギから生じた」という形容詞がモニエル梵英辞典に見られると言う。しかしそれが EW を意味するものかどうか定かではない。でも、「ラーマヤナにおいてどんな文脈で使われているのか、調べる価値がある」と興味を示してくれている。仮にそれが EW を意味するとして

も、アーリヤ人が本来的には EW を意味する言葉を持たず、その遊牧略奪的な民族移動の途上で EW に遭遇し、造語した可能性を匂わせる。勿論それは、インド侵入（紀元前一五世紀頃）以前の中央アジアか西南アジアで、あるいはインダス文明滅亡（紀元前一八世紀頃）後に侵入したパンジャブなど北西インドで、更にはインダス文明との関係が濃厚視されるドゥラヴィダ語族が堆積する南部インドでの遭遇であったかも知れない。ところで、南インドのドゥラヴィダ語族圏に、EW を意味する古い固有名詞は存在するのだろうか。それとも、アーリヤの文化的侵略サンスクリット化の怒濤に洗われ、人々は彼ら本来の EW の呼称をもう既に失っているのだろうか。

しかしストーリーは一つではない。もしサンスクリット語の「java」と「godhuuma」が独立的に借用され、「jave」と「goodhi」としてそれぞれカンナダ語化定着した後に、EW を意味する「javegoodhi」という複合語がカンナダ語内で成立したとするならば、EW を「オオムギの様なコムギ」と認識したのは、アーリヤ側ではなく、カンナダ語の側と言う事になる。それは彼らが遠い昔に EW を忘却していたか、あるいは彼らにとって EW が新しい外来の穀物だった事を意味する。とすれば、紀元前四〜三千年紀のインダス文明の遺跡から出土した EW と、タミル山岳部やデカン高原で栽培されている EW とは別系統である可能性も出てくる。インド洋に尖底土器のように突き出したインド半島に一体何処から？果たして、海の彼方からの EW 来訪は有り得るのだろうか。

5. アラビア海の三日月

坂本寧男（京都大学名誉教授）氏が EW に始めて出会ったのは、1967 年 12 月 24 日、エチオピアの首都アジスアベバ（標高 2500 m）の後背エントト山に高度馴化のため登山した時の偶然だった。「アジャ（EW）」と叫ぶ羊番の女の子に導かれ、初めて目にしたその EW は、一見してインドの EW と形態的に類似していると思ったと言う（阪本 1996）。その後、半世紀が経過しようとしている今、その観察の的確さは、大田正次さんの EW114 系統の比較栽培研究や、森直樹さんの葉緑体 DNA（母性遺伝）のマイクロサテライト座に現れる DNA 型（プラストタイプ）による EW の起源地や伝播経路の研究によって、証明されつつある。それによると、インドとエチオピアで栽培されている EW は遺伝的に極早の系統であるらしい。また、エチオピアの EW に特徴的なプラストタイプの一つ（三〇型）がインドの EW でも見出され

ると言う（森 2007; 2010）。エチオピアとインド両地域間での人的往來の可能性を示唆している。

インダス文明の遺跡から出土する EW は、新石器時代に「肥沃な三日月地帯」（地中海東岸～レバノン山脈～トルコのトロス山脈～イラクのザクロ山脈～イラン西南部クルディスタン高原）で栽培化されたものが、順当に東進した当然の結果のごとく見なされて来たかも知れない。同時に、南インドに遺存する EW もその系統に連なる末裔と。しかし南インドの EW の遺伝的生理的特徴からは、それを支持する事はできず、今のところ、インダス期の EW と南インドの EW は別の伝播経路で別系統と理解するのが妥当らしい。しかし飛躍すれば、インダス期の EW の系統と伝播経路が未知である限りにおいて、その出土した炭化種子が、デカン高原やエチオピア高原の現生 EW と同系統でないとも、言い切れないのではないだろうか。

パキスタンのバルーチスタン州メヘルガル遺跡が、西南アジア冬作物地域に属しているとするならば、メヘルガル出土の EW は現存の西南アジア・ヨーロッパ型の晩生タイプで、エチオピアや南インドの極早稲タイプとは異なると推測もできる。一方、同じく EW が出土したクナル遺跡があるハリヤナ州からは、イネ、リョクトウ、ゴマなどの夏作物の炭化種子が出土している（Saraswat and Pokharia 2003; 2003）（ローヒラー遺跡があるパンジャーブ州については現在論争中とのこと）ことから、混合冬作物夏作物地域と見ることが出来る。それらの出土 EW が、デカン高原やエチオピア高原でサバナ農耕の冬作として栽培されている極早生タイプの EW と同系統である可能性は残される。

上述の森直樹さんの研究において興味深いもう一つの点は、エチオピアの EW に特徴的な四つのプラストタイプの内、一五型と三一型のはアラビア半島の EW でも示されると言う（森 2007）。アラビア海を囲む地域に、類似したタイプの EW の系統が分布していることが明らかにされつつある。その意味で EW は、アラビア海を舞台とした古代の文化交流の痕跡を物語る生きた考古遺物に違いない。この「アラビア海の三日月」地帯における一つのミッシングリンクは、現生 EW が未確認の混合冬作物夏作物地域に横たわっている。しかしその空白には、葉緑体 DNA 抽出不可能なクナルやローヒラー出土の炭化 EW が、薄っすらと映し出されているかに見える。インダス文明の約 1500 の遺跡の内、発掘調査がなされたのは僅か 100 余りで、一割にも満たないと言う。EW

の視点に限って言えば、混合冬作物夏作物地域での考古植物学的調査、特に、アラビア海に面した西インドでの発掘調査に期待したい。

参考文献

- Apte, V.S. (1986) *A Practical Sanskrit-English Dictionary*, Rinsen Book Company, Kyoto.
- 大田正次 (2009) 「野生コムギの農業生態系への適応と栽培化」山本紀夫（編）『ドメスティケーション：その民族生物学的研究』調査報告 84、国立民族学博物館 153-176 頁.
- 大田正次 (2010) 「日常の生活が育んだ在来コムギの品種多様性：難脱穀性コムギの遺存的栽培と伝統的利用をめぐって」佐藤洋一郎・加藤鎌司（編）『麦の自然史』北海道大学出版会、281-307 頁.
- 長田俊樹 (1995) 日文研叢書 8 『ムンダ人の農耕文化と食事文化：民族言語学的考察』国際日本文化研究センター.
- Kittel, F. (1994) *A Kannada-English Dictionary* (original ed. by Basel Mission book & Tract Depository, Mangalore in 1894), Asian Educational Services, New Delhi & Madras.
- 阪本寧男 (1996) 『ムギの民族植物誌：フィールド調査から』学会出版センター.
- 千葉 一 (2009) 「南インドにおけるエンマー小麦の栽培分布に関するノート」『インダス・プロジェクト ニュースレター』第 5 号、インダス・プロジェクト（総合地球環境学研究所）、7-16 頁.
- Fuller, D.Q. (2006) 'Agricultural Origins and Frontiers in South Asia: A Working Synthesis', *Journal of World Prehistory* 20, Springer, pp.1-86.
- 森 直樹 (2007) 「インド南部に現存するエンマーコムギの栽培と利用」『インダス・プロジェクト ニュースレター』第 2 号、インダス・プロジェクト（総合地球環境学研究所）、5-8 頁.
- 森 直樹 (2010) 「染色体数の倍加により進化したコムギ」佐藤洋一郎・加藤鎌司（編）『麦の自然史』北海道大学出版会、37-68 頁.
- Saraswat, K.S. and A.K. Pokharia (2002) 'Harappan Plant Economy at Balu, Hariyana', *Pragdhara* 12 (Journal of the U.P. State Archaeology Department 2001-2002), Lucknow, pp.153-174.
- Saraswat, K.S. and A.K. Pokharia (2003)

'Palaeoethnobotanical Investigation at Early Harappan Kunal', *Pragdhara* 13 (Journal of the U.P. State Archaeology Department 2002-2003), Lucknow, pp.105-139.

AGU Chapman Conference on Climates, Past Landscapes, and Civilizations 参加報告

中村淳路 (東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 / 大気海洋研究所海洋底科学部門)

2011年3月11日から3月25日の期間においてアメリカのサンタフェで開催されたAGU Chapman Conference on Climates, Past Landscapes, and Civilizationsに参加し、ララ湖堆積物コアの分析結果について発表を行った。本学会は気候変動と文明の盛衰に関する学会で、古気候と考古学の両方の側面を融合した議論が行われた。筆者にとって初めての国際学会での口答発表であり、海外の様々な研究者、学生の方々と交流することができ、たくさんの刺激を受けた。特に論文を読んだことのある研究者に実際にお会いすることができ、その最新の研究発表を聴講できたことが印象的であった。本稿では事前に参加させていただいた巡検の紹介と学会報告を行う。

事前巡検のコースは、ラスベガスをレンタカーで出発し、フーバーダム、グランドキャニオン(写真2)、ホースシューベンド、モニュメントバレー(写真3)、メサベルデ遺跡(写真4)、チャコカルチャー遺跡(写真5)を巡り、学会会場のサンタフェに至る、総走行距離1500kmに及ぶ巡検であった。大陸乾燥地域の地形、地球の歴史を記録した地質、そしてアメリカ先住民族の遺跡を訪れる、まさに今回の学会の「気候変動と文明」がテーマの巡検である。地平線まで一直線の高速道路や延々と続く植生がない赤茶色の大地に大陸のスケールの大きさを実感した。グランドキャニオンの標高差1500mの崖には、過去に北米大陸西部がたどってきた歴史がぎっしりと刻まれている。「すごい」としか言葉にならない絶景だ。メサベルデ国立公園内のクリフパレスは、崖下の窪みに日干し煉瓦で作られた集落遺跡である。1300年代頃に放棄されたと考えられており、その

原因については謎だという。遺跡を見学しながら、なぜ放棄されたかという議論で盛り上がった。

学会はこれまでに論文を読んで知っていた研究者の方と実際に話をできたことが、学生の筆者にとって感激だった。口答発表だったこともあり、顔を覚えていただいていたので、声をかけやすかったことも大きい。最も関心をもったのはBerkelhammer氏のインドの石筍を用いたインドモンスーンの復元である。同氏が2010年にEPSL誌に発表した過去1500年間の石筍の酸素同位体比記録にかねてから注目していたが、今回の発表は過去1万年間の新しいデータについてであった。今後インドにおけるモンスーン変動復元のスタンダードとなるデータとなることが予感され、改めて、筆者もララ湖を頑張らなければと刺激を受けた。

環境変化と文明の関係の発表を最新の研究を聴講し2つのことを感じた。ひとつは放射性炭素年代を用いた年代モデルの重要性であり、もう一点は学際的研究の面白さである。古気候復元の研究の年代測定には放射性炭素年代がよく用いられるが、測定と暦年較正の過程を通して50年から100年程度の誤差を含んでしまう。さらに海洋のサンプルであればリザーバー効果の補正なども加わり不確定性は大きくなる。年代モデルの向上が必要不可欠だと感じた。年代の測定点を増やすことが近道ではあるが、サンプルによる制限、分析に要する時間、コストなどにより分析数は限られてくる現状がある。必ずしもすべての研究が同じような年代モデルに基づいているわけではないので、年代決定の不確かさとその要因を意識することが大切だと感じた。また、気候変動と文明衰退の関係についてはタイミングの一致不一致が研究のスタートで、その先の因果関係については考古学と古気候学が同じグループとして研究することが大切であると感

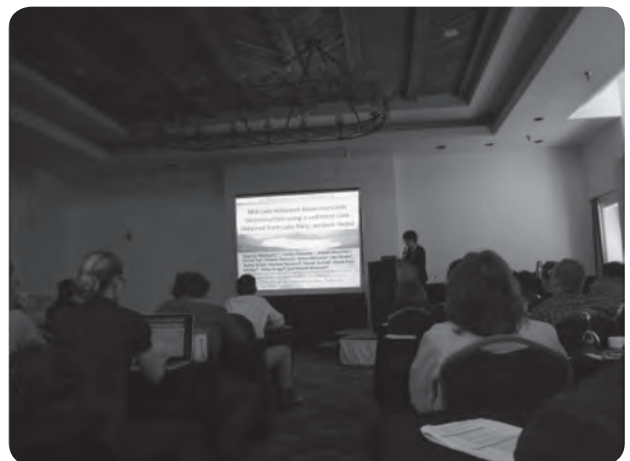


写真1 発表中の筆者の様子



写真2 グランドキャニオン



写真3 モニュメントバレー



写真4 メサベルデ遺跡



写真5 チャコカルチャー遺跡

じた。発表の質疑応答を通して文明と気候変動の関係が統合されていく様子は生き生きとして面白かった。筆者は地球惑星科学専攻に在籍していて普段の大学のセミナーや授業で文明に関する話を聞く機会は少ない。地球や人間の歴史そのものも楽しいけれど、地球の歴史と人間の歴史を重ねることで、両者がさらに面白くなってくると感じている。

※編集註

AGU (American Geophysical Union: アメリカ地球物理学連合) とは、地球物理学分野での世界最大の学会であり、気象学・海洋学、固体地球物理学、水文学、宇宙科学の4分野から成り立っている。その中でも当報告の会議は下記の趣旨のもとで行われた。

AGU Chapman Conference on Climates, Past Landscapes, and Civilizations

Santa Fe, New Mexico, USA

21–25 March, 2011

Conference Objectives and General Description

Human society is intimately linked to the environment that sustains it. Civilizations have evolved during a period of unique climatic stability since the onset of the Holocene, around 10 ka. However, even within this overall framework of stability, changes in regional and global climate have significantly impacted the development of societies. To understand the effects of climate change, population increase, and resource exploitation on modern societies, a better understanding of how climate, landscapes and civilizations have interacted in the past is needed. Although these processes impact most strongly poorer, less prepared countries, nevertheless, as Hurricane Katrina has shown, even the wealthiest countries are not immune to the effects of environmental catastrophe. This Chapman meeting will assess the present state of science on how mankind and the environment have

interacted over a variety of time and spatial scales. We encourage participation of scientists from across the fields of the ocean and Earth sciences, as well as anthropology, archaeology and historical sciences to present their recent research. Although the meeting will feature keynote speakers and established researchers we encourage participation from early career workers and Ph.D. students.
(URL: <http://www.agu.org/meetings/chapman/2010/ecall/index.php>)

招へい外国人研究員 P. アジトプラサードさんの来日

この5月から3ヶ月間の予定で、インド、グジャラート州のバローダーにあるマハーラージャー・サヤジラーオ大学のP. アジトプラサード (Ajithprasad) さんが来日されました。招へい外国人研究員として2008年に続き2回目の滞在となります。

今回の滞在では、アジトプラサードさんが調査されているグジャラート州北部の遺跡から出土した様々なサンプルをお持ちいただき、その分析を試みました。それぞれの結果につきましては、近い内に発表できるかと思いますので、しばらくお待ちください。また今回は精力的に国内を移動され、近畿地方の旧石器時代の遺跡や広島宮島などを訪れ、見識を深めていただきました。

アジトプラサードさんは8月10日に帰国されます。残りわずかですが、よろしく願います。また、帰国間近のご紹介となってしまう、申し訳ありません。



P. アジトプラサードさん (比叡山にて)

国際シンポジウムのお知らせ

インダス・プロジェクトでは毎年開催しております国際シンポジウムを8月7日(日)・8日(月)に行います。今回の国際シンポジウムが当プロジェクト主催の最後の国際シンポジウムとなります。プロジェクトの総括にはまだ間がありますが、皆様のご参加をお待ちしております。

Indus Project International Symposium 2011 "Environmental Change and the Indus Civilization"

Sunday, 7 August 2011

13:00-13:45 "An archaeobotanical Study in the Indus Civilization", Steven A. WEBER (Washington State University)

13:45-14:30 "Significance of Lakhn-Jo-Daro in Indus Civilization", Nilofer SHAIKH and Qasid MALLAH (Shah Abdul Latif University)

14:30-15:15 "Excavations at Shikarpur, Gujarat 2010-11", P. AJITHPRASAD (The M. S. University of Baroda)

[Break]

15:30-16:15 "Locational Analysis of Two Indus Period Urban Centers of Indus Valley: the Chanhudaro and Nahuto", Qasid MALLAH (Shah Abdul Latif University)

16:15-17:00 "SUMMARY of Results of First Phase Excavation at Kanmer, Gujarat, India", J.S. KHARAKWAL (JRN Rajasthan Vidyapeeth)

17:00-17:30 Discussion

Monday, 8 August 2011

9:30-10:00 "Variability of the Asian monsoon as a potential candidate for decline of Indus civilization", Atsunori NAKAMURA (The University of Tokyo)

10:00-10:30 "Mid Holocene climate reconstruction using oxygen isotopic composition of modern and fossil catfish otolith in North West India", Kaoru KUBOTA and Atsunori NAKAMURA (The University of Tokyo)

- 10:30-11:00 “Geomorphological Constraints on the River Regime of the Ghaggar during Mature Harappan Period, Northwestern India”, Hideaki MAEMOKU (Hiroshima University)
- 11:00-11:45 “A summary of oral and poster presentations by our project members at AGU and EGU”, Toshiki OSADA (RIHN)
[Lunch]
- 13:00-14:00 “Cows and bulls in Old Indo-Aryan literature”, Toshifumi GOTO, Naoko NISHIMURA (Tohoku University) and Chisei OSHIMA (Institute for Research in Humanities, Kyoto University)
- 14:00-14:30 “The two ancient wheats, emmer wheat and Indian dwarf wheat, are still alive in India - their cultivation and utilization -”, Shoji OHTA (Fukui prefectural University), Naoki MORI (Kobe University), and Hajime CHIBA (Tohoku Gakuin University)
- 14:30-15:00 “Chloroplast DNA variation in emmer wheat and Indian dwarf wheat in Indian subcontinent”, Naoki MORI (Kobe University), Toshiya TAKAGI (Kobe University), Hajime CHIBA (Tohoku Gakuin University) and Shoji OHTA (Fukui Prefectural University)

地球研国際シンポジウムのお知らせ

総合地球環境学研究所では、10月26日～28日にかけて第6回地球研国際シンポジウム「Beyond Collapse: Transformation of human-environmental relationships, past, present and future」を開催します。その中のセッションの1つとして、インダス・プロジェクトも「Beyond collapse: In the case of Indus Civilization」として参加します。詳細につきましては後日連絡いたしますが、当プロジェクトからは、プロジェクトメンバーの横山祐典さん、Steven A. WEBERさん、後藤敏文さん、プロジェクトリーダーの長田俊樹さんの発表を予定しております。お時間の都合がつく方は参加をご検討下さい。

日本のサラスヴァティー探訪

遠藤 仁 (総合地球環境学研究所)

インダス・プロジェクトの古環境研究グループでは、コアメンバーの前杵英明さんを中心にハリヤーナー州、ラージャスターン州を流れるガッガル川(旧サラスヴァティー川)の調査を進めている。その調査の詳細は前杵さんの報告(前杵他 2009、前杵他 2010 など)を参照していただきたい。

ここでは、この川の旧名サラスヴァティーについてのみ触れたい。サラスヴァティーはヒンドゥー教の女神名であり、日本においては仏教や神道に取り込まれ、七福神の一柱、弁財天(弁才天)として広く知られている。

そこで、調査の本筋ではないが、遠くインドの地からはるばる日本に来られた女神様が、如何に変容してこの国に受容されたかを探るべく、前杵さんの提案で日本三大弁財天*の1つである広島県宮島の大願寺のご本尊をそのご開帳に合わせて参拝した。参加したのは前杵さんの他、P. アジトプラサードさん、遠藤である。大願寺の弁財天開きは毎年1回6月17日に行われており、この日を逃すとその後1年間そのご尊顔を拝むことはできない。年に1度の機会とあって、大願寺は地元の人々を中心に混雑し、長蛇の列を並び無事に我々もご本尊を拝むことができた。寺の秘仏である弁財天は残念ながら撮影禁止のため皆さんにお見せすることはできないが、歴史の重厚さと造形美を十分に感じることができる女神様であった。

肝心のインドからの受容と変容であるが、その姿形は下の図に見えるように大きく異なっており、アジトプラ



サラスヴァティー (左) と弁財天 (右) (wikipedia.org)

サードさんも、「これがサラスヴァティーだ」と言うと戸惑っておられた。サラスヴァティーは日本に受容される際に多くの他の神と習合し、多くの信仰体系が混合した結果現在の姿と信仰が出来上がっているため、一概に比較することはできず、一参拝者の手には余る。しかし、共に水辺に佇むその姿や、慈しむような眼つきは共通しておりその同根を窺うことができる。

弁財天は学芸の神としても知られているため、我々はインダス・プロジェクトの無事の終了と今後の研究の継続を祈願し、同時に財宝神としても知られているため大枚の賽銭と共に今後の調査費用が潤沢であるように祈願した。

※日本三大弁財天は、異説もあるようだが大願寺の他に奈良



広島県 宮島 大願寺の弁財天開き

県天川村の天河大弁財天社、滋賀県竹生島の宝厳寺があり、他に神奈川県江の島の江島神社を加える場合もある。最寄にある場合はインダス・プロジェクトの無事の終了を祈願して下さい。

参考文献

- 後藤敏文・山田智輝・永ノ尾信悟 (2008) 「ヴェーダ時代のサラスヴァティー河をめぐる」『環境変化とインダス文明 2007 年度成果報告書』総合地球環境学研究所
- 前杵英明・長友恒人・下岡順直 (2009) 「インダス文明の盛衰と自然環境の変化に関する研究—ガッガル川の河川環境変化に関する調査—」『環境変化とインダス文明 2008 年度成果報告書』総合地球環境学研究所
- 前杵英明・下岡順直・長友恒人・八木浩司 (2010) 「盛期ハラッパー文明期におけるガッガル川の河川環境—大河サラスヴァティーは存在したのか—」『環境変化とインダス文明 2009 年度成果報告書』総合地球環境学研究所

Wikipedia <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

編集後記

ニュースレター第8号をお送りいたします。この度も発行が遅れてしまい、申し訳ありません。今回は昨年度末に生業研究グループがインドで行った調査およびアメリカ地球物理学連合への参加報告となっています。ご寄稿いただいた方々に篤くお礼申し上げます。

今年度は当プロジェクトも最終年度となりました。プロジェクトの終了に向け、まとめの準備を鋭意進めております。残り少ない期間ですが、変わらぬご支援をお願いいたします。
(遠藤 仁)

インダス・プロジェクト ニュースレター 第8号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹
編集・発行 インダス・プロジェクト
発行日 2011年8月5日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>